

the first solo exhibition

ギャラリー椿(京橋) 1996.4.15~27



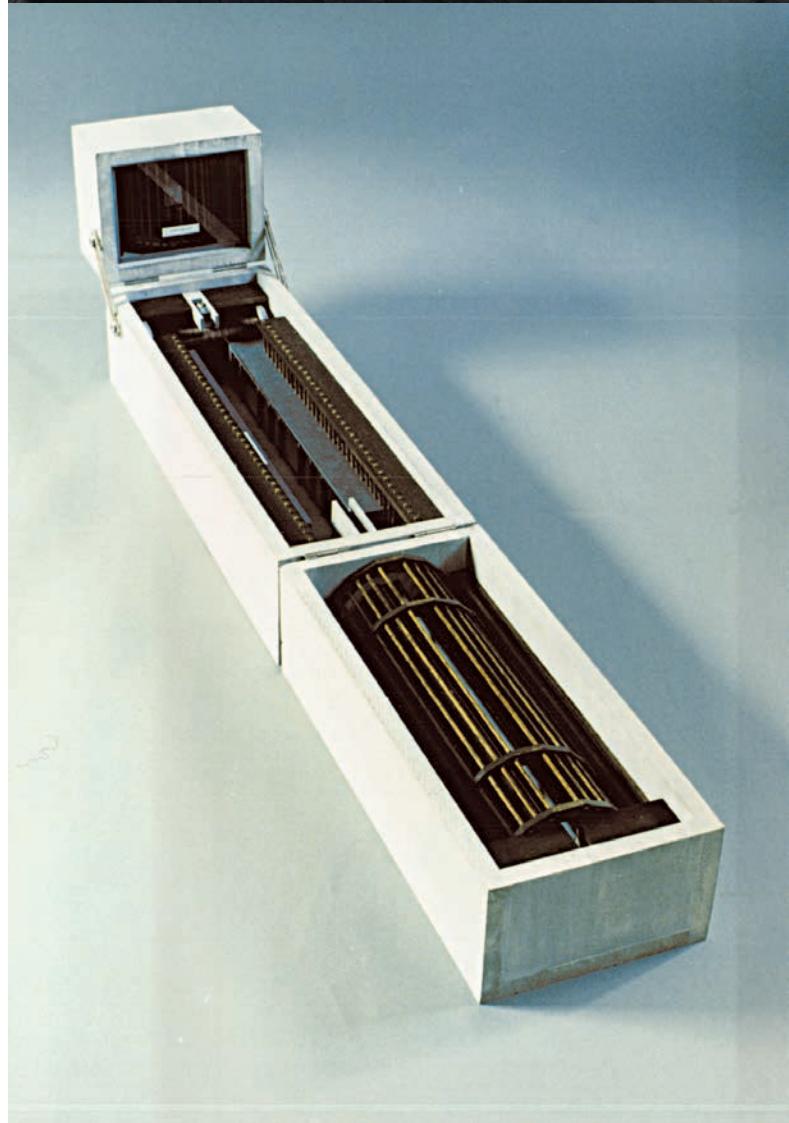
作品と制作について

私は世界を箱にしまい込むもうとしている。ちょうど子供が大切ながらくたを秘密の小箱にしまい込んでいるのと同じように。

箱という形をとるようになったきっかけは、何冊かの本との出会いだった。何の変哲もない一冊の本を開くと、確実に私自身と呼応して、世界が広がっていくのを感じた。そういう存在のものに、私は私の作品をしたかった。

箱に直接手を触れて開いてもらうことによって、具体的で個人的な出会いの場と時間を共有することができるよう。そして、箱は普段は閉じられていくことによって、世界はいつも内側に在ることを表していた。

そこここにひっそりと在る世界を、どうにかつかまえようとしている。



"Small gate 1" 1995

wood, lead plate, and acrylic plate

「小さな門 1」 1995

close:w150×d470×h180—open:w150×d910×h210mm

木・鉛・アクリル

東京オペラシティアートギャラリーコレクション 蔵

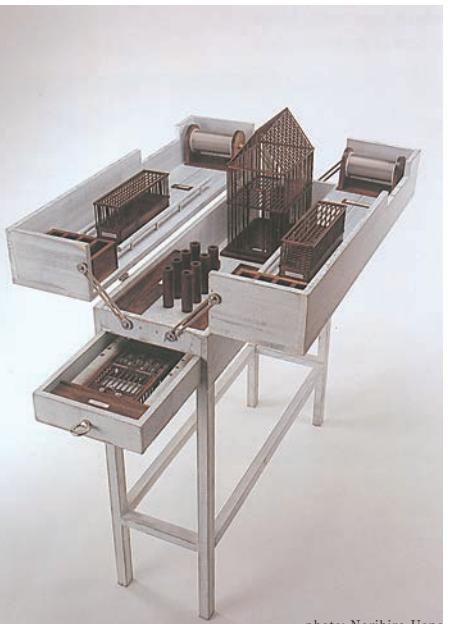
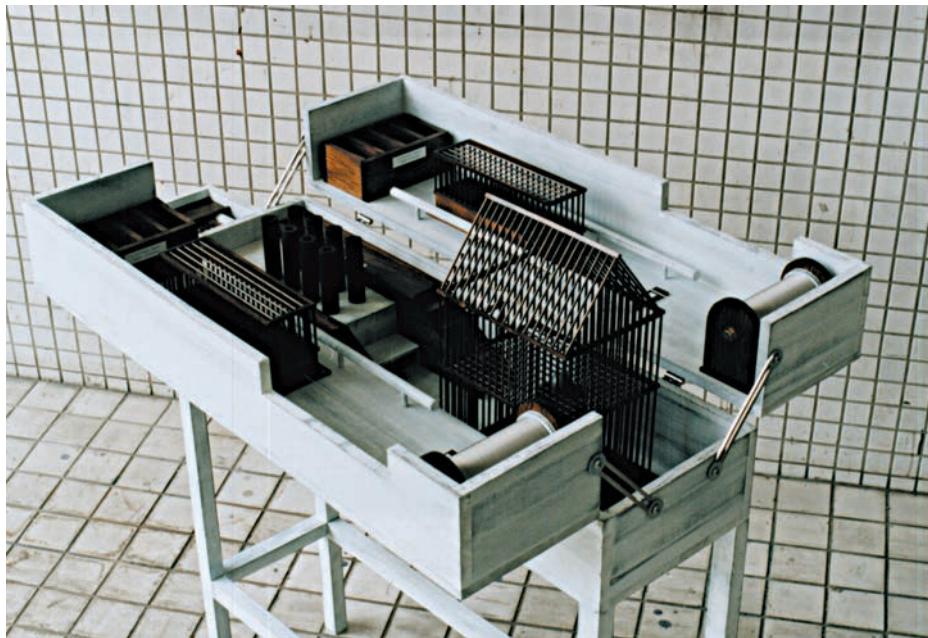


photo: Norihiro Ueno

"Device to catch bird" 1995

wood, lead plate, and wire

「鳥をつかまえるための装置 i」1995

close:w240×d800×h980—open:w600×d1030×h980mm
木・鉛・ワイヤー

"Mirror of the sky" 1996

wood, acrylic plate, copper, and mirror

「空の鏡」1996

close:w200×d320×h170mm
木・アクリル・銅・鏡
個人蔵



"Containers for distance and metamorphosis"

The Exhibition of Collaboration: Poems and Objects

Poems "Linguistic Atlas" by Ryoko Sekiguchi × Objects by Aya Koizumi

「距離と変容の器」 詩と立体のコラボレーション展示 1997.3.24~4.3 ギャラリー椿

詩「言語地図」:関口涼子 × 立体作品:コイズミアヤ



100枚のカードからなる詩集「言語地図」を入れた100個の小箱とそれを受け入れるための立体作品としての数点の箱

There are 100 small boxes.

"Linguistic Atlas" that is the book of poems which consists of 100 pieces of cards is in those boxes each. And there are some art boxes to receive them.

関口さんから最初に話があったのは、造本を手伝ってほしいというものだった。100枚のカードによる詩集「言語地図」を、私の作った箱に何らかの形で入れて完結させたいということだった。テクストである「言語地図」は詩集としてはすでに出来上がっていたが、それだけでは完結できずに、他に何かを求めているという。話しているうちに、造本にとどまらずに、コラボレーションとして一緒に展示することになった。

普段から作品を作る際に、言葉は私にとっての大切なツールの一つだった。言葉からイメージを広げることもあったし、実際に作品自体に言葉を入れている。詩とのコラボレーションにはとても興味があつた。

しかし、違うジャンルとしての言葉、詩との共同制作は思うほど容易ではなかった。詩は、言葉としてそれ自体が一つの世界を形成している。テクストはすでに書き上げられていたものであって、それを私がどう受け入れるかということだった。また、多くの詩と造形作品のコラボレーションでおこりがちな、詩の物質化（言葉の無限性、非物質性という本来の特質が、造形作品と一緒にになることで、文字の印刷された紙、または本という縦・横・厚みのある物体として、有限・物質の方向へ傾くこと。）と、詩の神秘化（一点ものや小数の限定物の作品に取り込まれることや、詩を読むことが不可能、または困難な形で作品に取り込まれることによって、必要以上に神秘的な要素を持つこと。）を避けようということになった。

「言語地図」との出会いに対して、どういう答えを出したらいいか。受け入れ先を待つテクストと、どうにかこうにかテクストを受け入れようとする造形作品。

◆「言語地図」をKEYとした。

KEYは、本体を要求する。

私の作品はKEYがないと、一部分が完全に欠落したものになる。

◆「言語地図」のテクストを入れたKEYとしての小箱を100個作る。

◆100個のKEYは、すべて同一種類のもので、同価値のものとする。

小箱の数の100は、massとしての100である。

◆「言語地図」は箱を閉じるための、また箱を開くためのKEYとする。

◆詩を取り出すことによって、世界があらわれる。

詩との出会いが、同時に造形作品との出会いになるように。

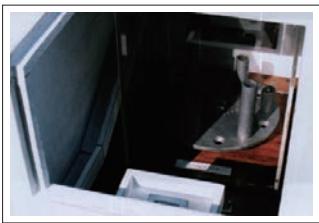
詩を読む。「言語地図」を読む。関口さんのことが少しわかる。自分のことをまた少し確認する。

私は箱の形で作品を作る。立体額縁のような箱ではなく、完全にしまい込む形としての箱である。私が開けば私をうつし、彼が開けば、彼女が開けば、それぞれ彼らを第一人称としてうつすような箱。詩をはじめとして、読むと個々それぞれに意味を持って響いてくるようなもの、大切にしている本のような存在のものに、私の作品がなれたらいいと思っている。

今回の展示では、実際に詩と一緒に作品を見せることになる。ジャンルの違う二つの表現、二人の人間の表現が対峙されることで、新たに響いてくるもの、生まれてくるものがあるはずである。それがきちんと力を持って、見る人、読む人、触れる人に感じてもらえたらしいなと思っています。



3.



2.



1.



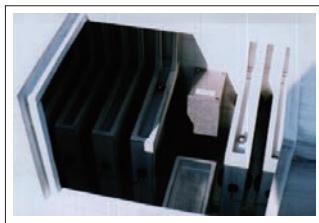
4.



5.



6.



7.

1. "Now going to a underground, sometime to the sky"
「今は地下へ いつか空へ」200×400×300

2. "Confined wind"
「閉じ込められた風」200×300×240

3. "Thought to a distant place"
「遠くへの想い」310×350×220

4. "From a closed place"
「閉鎖された場所から」400×200×300

5. "Of a moment(a dim flash)"
「瞬間の(かすかな閃き)」250×320×300

6. "The play with the unknown perception"
「感知しないものの遊び」320×240×200

7. "Memory of forgotten things"
「忘れられたものの記憶」350×240×280

"Now going to a underground,
sometime to the sky" 1996
wood, lead plate, acrylic plate, and piano wire

「今は地下へ いつか空へ」1996

w200×d400×h300mm
木・鉛・アクリル・ピアノ線
個人蔵



"Empty container for unknown faith"

「未知の信仰のための空の器」 1998.6.15~20 コバヤシ画廊(銀座)



「未知の信仰のための空の器」という言葉を、ある1冊の本からみつけた。ブルーノ・タウトが、彼が設計した礼拝用の「ガラスの家」(1914)をそう位置付けていたらしい。彼は「私がもし空虚で純粹であるならば、神もまた自己の自然界により私に身を委ね、そして私の中へと入ってくるに違いない」と語っていたとあった。

私には、彼の語っていることの意味がストレートには理解できなかったものの、「未知の信仰のための空の器」という言葉に、何か自分の内と響きあうものを感じて、私にとってのそれはどういうものなのか、どんな意味があつてどういう役割をもつのかを思った。

私は日本人に多い形での無宗教である。キリスト教や仏教といった、すでに確立している社会的にも認知されているような信仰をもつているわけではないが、ただ漠然とした神様のような大きな力を信じている。今までの制作でも、私にはっきりとした形での信仰がないにもかかわらず、神殿や教会、修道院といった信仰の場のイメージを重ねたことがあるのは、そういうものを求める傾向が強いということの現われであった。

心理学者のフルールノワは、人の無意識には神話を形成する力がそなわっているとし、ユングもまた元型(人類すべてに共通する心の構造で、個人の無意識より下層の、集合的無意識を構成するもの)の内に宗教・人種・歴史的時代・地理的位置にかわりなく、似たような神話を生じさせる要素があるとしている。人は何一つ知らない事柄に関しては、想像力が必死に空白を埋めようとする。自分のまったく知らない領域を前にすると、私たちはそこに自分自身の心的活動を投影し、そこを意味で埋め尽くそうとする傾向があるという。そのようなときに生じてくるものなかに神話や運命、神のような大きな力を感じることがあるのかもしれない。

私がどういうときに信仰と言えるようなものを感じるかというと、ひとりで自分と出会うときだと思う。ひとりで何かと出会ったり、ひとりで何かを見たりするときが、一番余計なもの何も無くなった状態になれ、そこで何かを感じられたら、自分が祝福されているというようなやさしい気持ちになれる。

私は今までそういうことをはっきりと自覚して制作してきたわけではなかったが、自分の経験から、ひとりで出会うことの大切さを思い、見るもの自分で開き出会うという形のための箱をつくってきた。しかし、今回はそれだけでは飽きたらず、その箱のなかでひとりで歩いてみてもらえたらいいと思い、制作した。

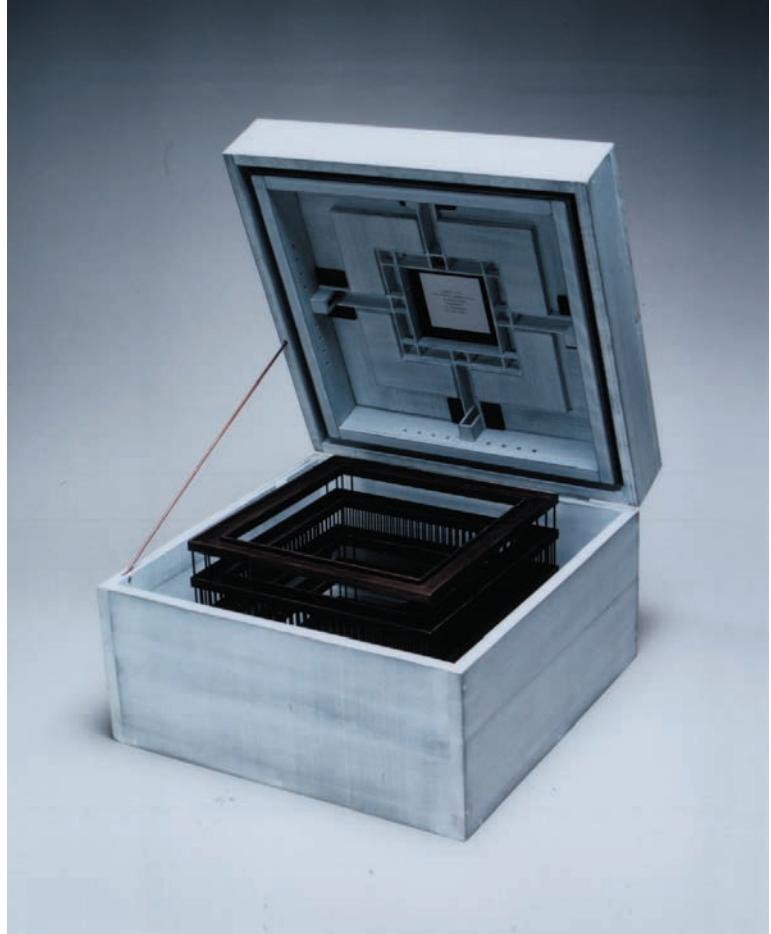
1. "the dark"
(閣)
2. "dialogue"
(対話)
3. "pursuit"
(追求)
4. "meditation"
(瞠想)
5. "link"
(環)
6. "time"
(時間)
7. "metempsychosis"
(輪廻)
8. "recurrence"
(回帰)

8. 7. 6. 5.
1. 2. 3. 4.



"meditation" 1997
wood, lead plate, acrylic plate, and copper stick

「 meditation 」 1997
close:w400×d400×h240mm
木・鉛・アクリル・銅



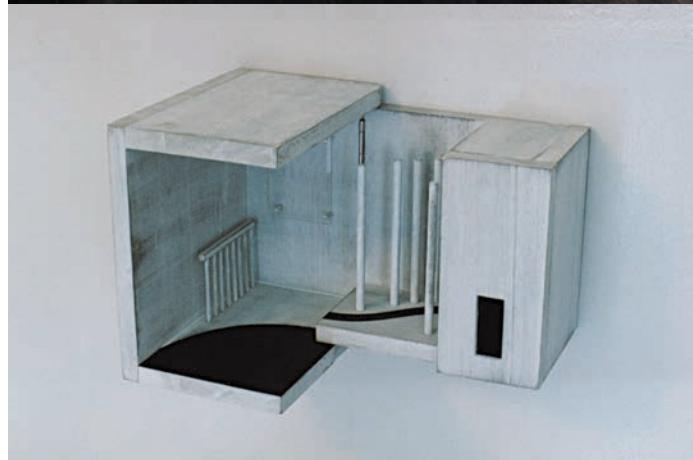
"Destination"

1999.7.11～24 ギャラリー椿



内側に
行き先も目的もわからないままの気持ちがあつて
すべてが闇であつて
まったく迷っているようでもあり
すべてが光であつて
決して間違えないようでもある

そんな「行き先」を、矛盾を含めたままで、つくってみる



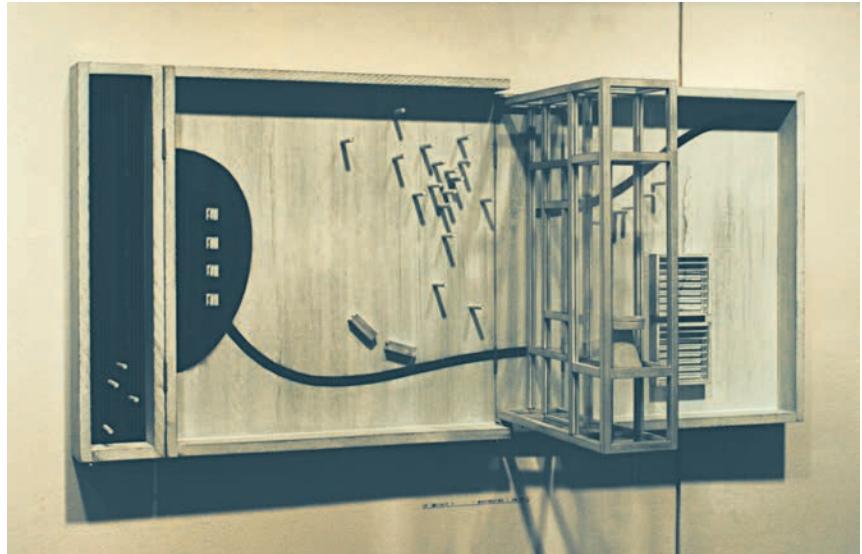
"In a forest i" 1999
wood and acrylic plate

「森の中で i 」 1999
close:w177×d120×h177 - open:w271×d177×h177mm
木・アクリル
個人蔵

"In a forest II-i" 1999
wood

「森の中で II-i 」 1999
close:w400×d120×h177 - open:w588×d280×h177mm
木
個人蔵





"About a garden I" 1999
wood, acrylic plate, and compass

「庭について I」1999
close:w465×d466×h130—open:w1000×d466×h340mm
木・アクリル・方位磁石

"About a destination i" 1999
wood and acrylic plate

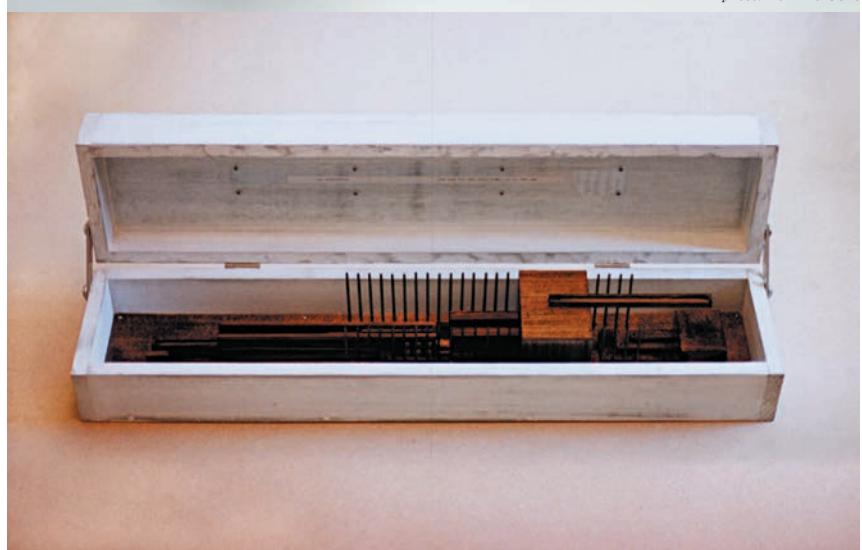
「行き先について i」1999
close:w220×d220×h180—open:w220×d440×h90mm
木・アクリル

"one-a" 1997
wood and acrylic plate

「 one-a 」1997
close:w600×d130×h110mm
木・アクリル
個人蔵



photo: Norihiro Ueno



"Garden- the world technique -"

「庭- the world technique -」 1999.11.9~14 Gallery Jin(吉祥寺)



「 箱庭療法との出会いと、意味について思うこと 」

今までずっと箱の作品をつくりてきた。

「箱」に対しての私の気持ちは、内側ということを表していたり、個人的なスケールについてだったり、秘密めいたものであったり、独立した世界であったりした。

「つくること」に対しての私の気持ちは、人に何かを伝えたかったり、思ってもらいたかったりすると同時に、自分の何かを解放するというような、自分自身の精神衛生面のことも含まれていたように思う。

二度目の個展のときに、私の作品を見ながら、「箱庭療法って知っていますか?」と聞かれたことがあった。箱庭をつくりながら精神面の問題を治療していくものだという。「箱庭療法」という言葉のひびきに、何なく惹かれるものがあり、また、心理学にも興味があった私は、それからしばらくたってから、本で調べてみた。それは非常に興味深い内容だった。

まず、クライエント(患者・被験者)に、決められた大きさの箱の中に、好きな玩具を好きなだけ用いて、好きなように表現させる。その間治療者が付き添い、作業に取り組む様子や、その内容を観察する。クライエントと治療者の関係がうまくいったときに、意味のある表現がなされる。意識的な表現では意味が少なく、無意識的表現がなされたときに、治療的効果が得られる。クライエントが選んだ玩具の種類や数、物語の主題、世界の印象などから非常にたくさんのが読み取れる。左右や上下といった空間配置、動きの向きなどにも意味があらわれるという。

表現するということ、何かを選んである場所に配するということに、それだけの大きな意味があらわれることがあるということに、改めて気付かされ、驚いた。

美術家が作品を制作するにあたって、モチーフを「ここだ」という位置に配置するときのことを思った。そのひとつのが行為にどれだけの思いが込められ、意味のあるものにできるのだろうか。意識的に行われる配置と、無意識的に行われる配置。意識的ゆえに意味のある場合と、無意識ゆえに意味のある場合とでは、意味の意味するところも違ってくる。本当にそれが意味のあることなのか見極めることは、少し難しい。造形的な経験ゆえに、手癖のような、非常に表面的で内容の少ない配置を行ってしまうこともあるように思う。コンセプチュアルな理由から、「そこ」でなければならなかったのか。神が降りてきたというような感触から、「そこ」にせざるをえなかつたのか。肩の力を抜いた状態で、とても自然な配置が行なえ、まだ自分でも自覚できていなかった何かがあらわれてくるのか。

意味はあとから見い出されるのかもしれない。

私はだいぶ前とくらべると、あまり「意味、意味」と片意地はって作品をつくることをしなくなっている。箱の作品をつくり、人にみてもらうことにより、自然と自分も癒されていったのかもしれない。意味という言葉に嫌気さえ感じはじめていたのであるが、「箱庭療法」と出会い、意味についてふと考える状況に置かれ、今では、肩の力を抜いたまま、ひとつひとつの作業と、その意味を大切にしたいと思っている。

今回は、箱庭療法で実際に使われる大きさの箱を用い、モチーフを配置するという、ひとつのもの、ひとつの動作について取り上げた作品を展示する。

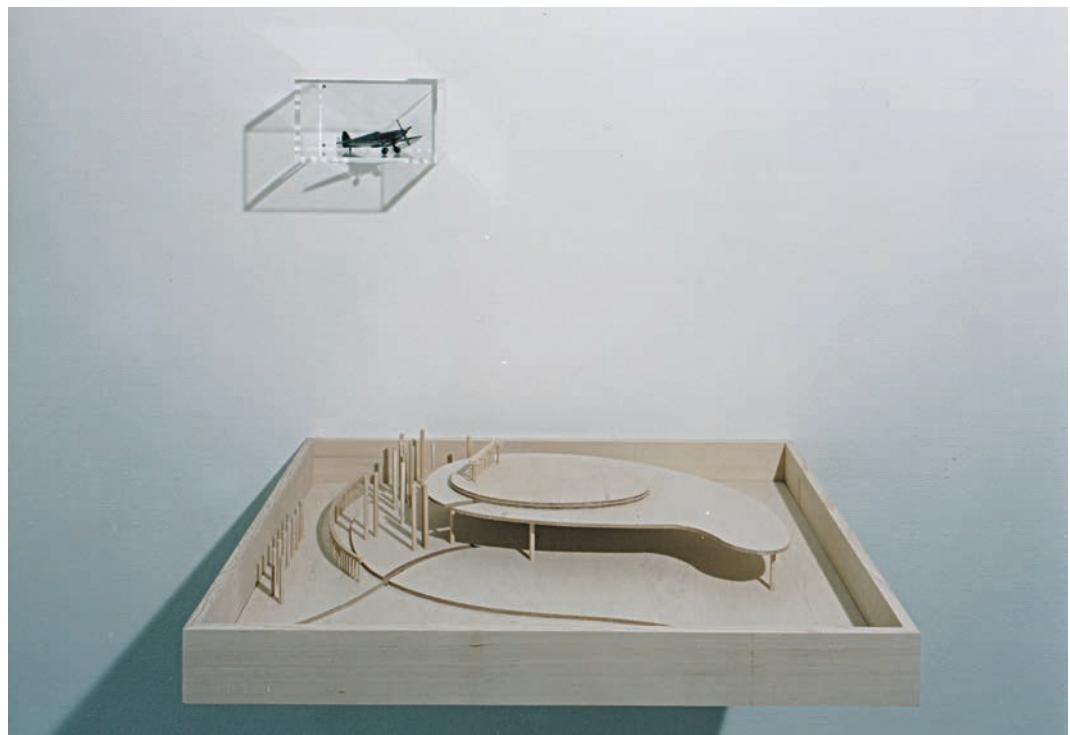
*『箱庭療法入門』 河合 隼雄 編 (1969 誠信書房)

「庭」

とても身近でいつも一緒に在って
目も手も届く範囲のもので
具体的に私のものであり
その中では私の安全は保障されている。

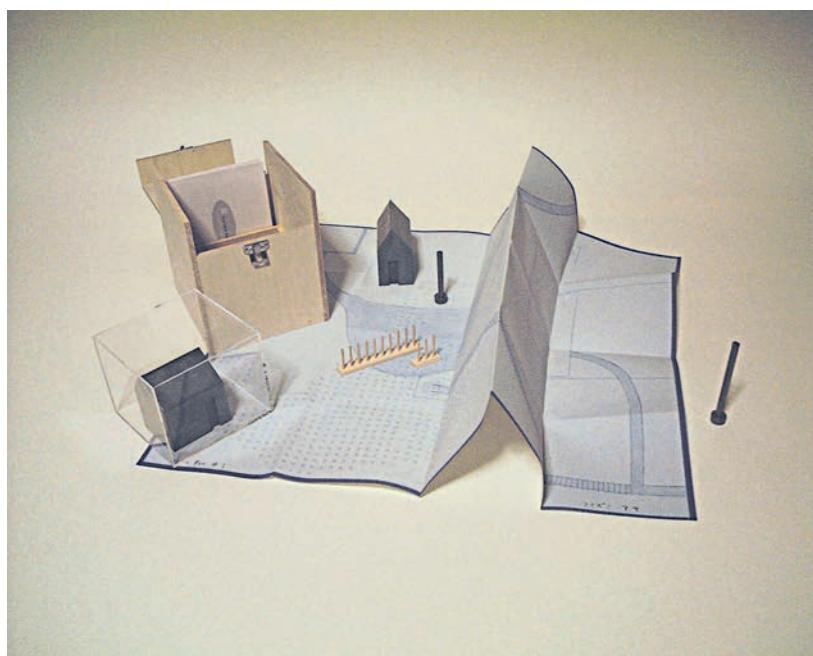
でも、
すべてが私の思うようになるわけではなく
掘り返してみれば、私以前のものが出てきたり
時と共に思わぬ変化が現われる。

自分の中の
ひとつの出来事。



"Garden - e." 1999
wood, acrylic plate, lead plate,
and a fighter plane of a plastic model

「庭 - e.」 1999
上:w200×d145×h120, 下:w746×d596×h105mm
木・アクリル・鉛・プラモデルの戦闘機

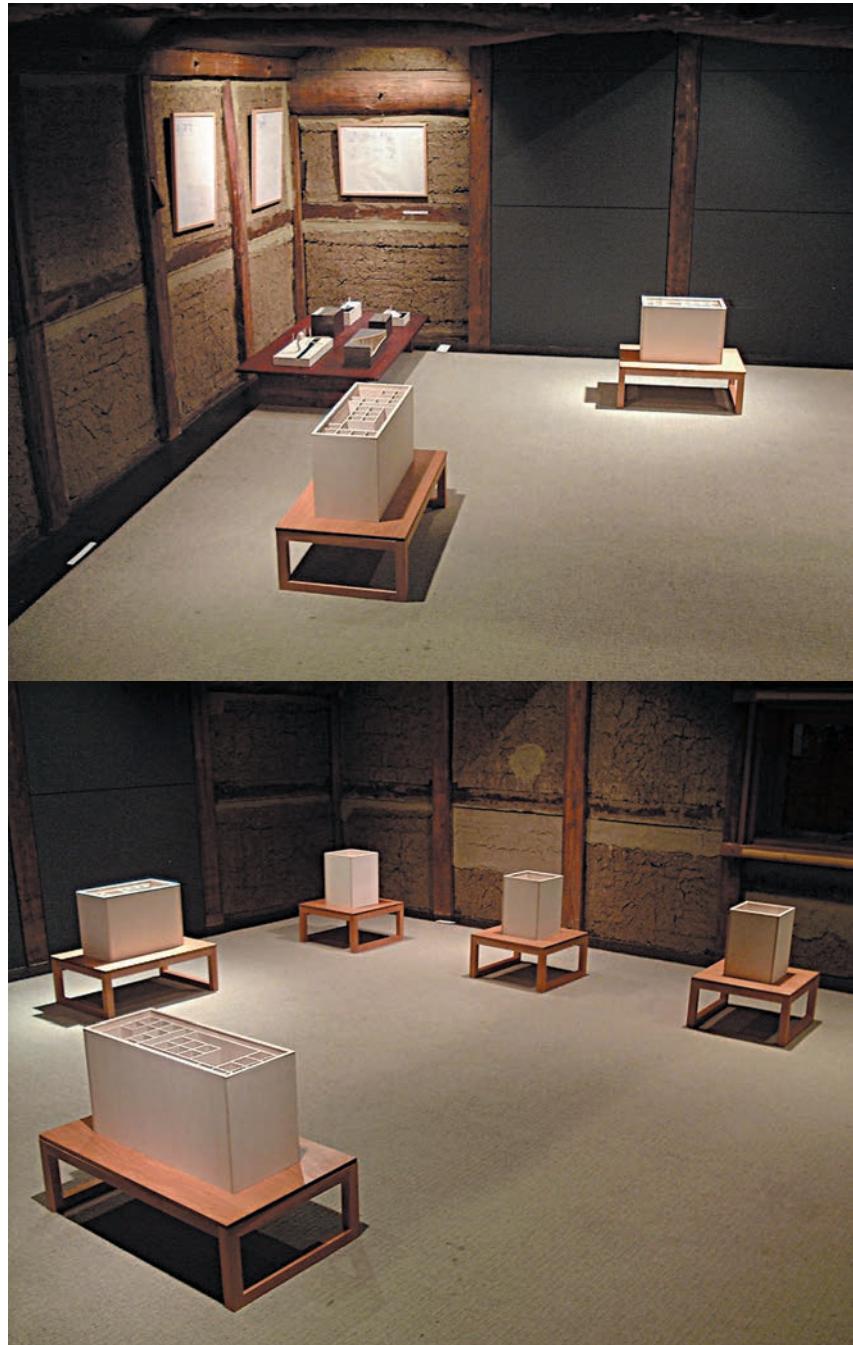


"Garden Box #1" 2000
wood, acrylic plate, lead plate, and a map of a blueprint

「Garden Box #1」 2000
close:w120×d137×h140mm
木・アクリル・鉛・青焼きの地図
個人蔵

"Rooms"

【部屋】 2000.11.16～12.11 樂風(浦和)



【部屋】

自分の中にあって
普段自分が接していないもの、
自分のものであるのに
知らない場所、
自分の中で
勝手に成長しているもの、
そういうものに興味がある。

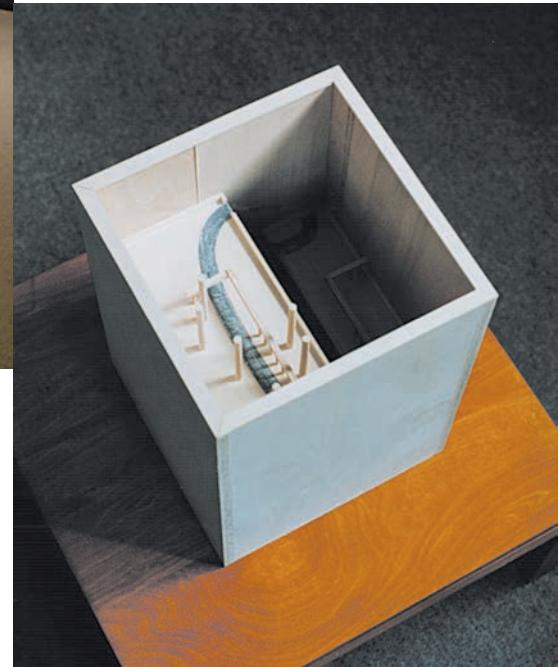
自分の頭や心の中では
たいかいの知識や思い出、考え方や気持ちなどが
整理分類され、
おさまるべき場所が用意され
おさめられていく。

空間は仕切られ
増殖し、変容していく。

はじめは(生まれて間もなくは)
今、目にしているもの、聞こえている音、記憶、感情が
断片的で、文脈を持たず
すべてが等価値で、渾沌としているのだと思う。
空間はまだ仕切られることもなく
空間といえるようなものでもなく
身体と一体である。

もはや
空間の増殖と変容は、自然に行われている。
すでに自分の知らない部屋がある。

その新しく美しいであろう場所へ
行ってみたい。
その隅の方にある場所へ。



"The room nobody knows iii" 2000
wood and lead plate

「知らない部屋 iii」2000
w200×d200×h273mm
木・鉛



"About the rooms i" 2000
wood and lead plate

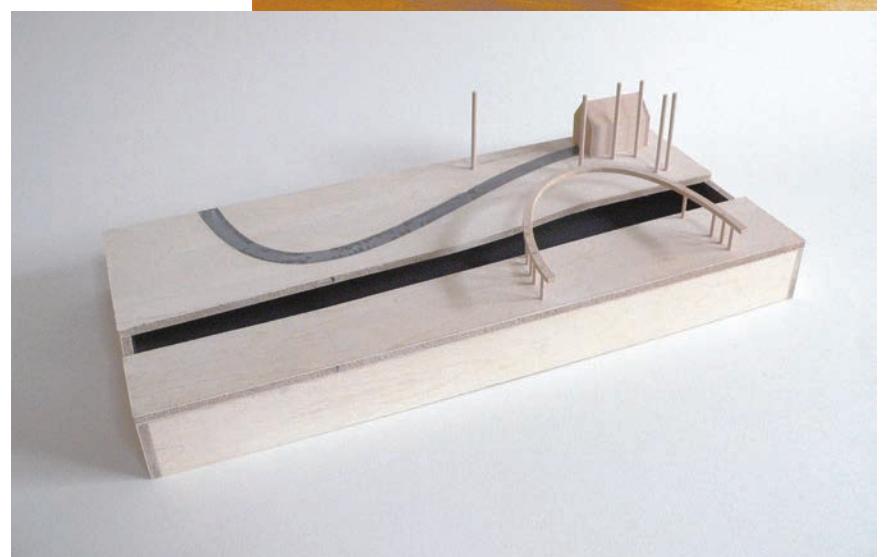
「部屋について i」 2000
w381×d201×h273mm
木・鉛

"(One opportunity)" 2000
wood and lead plate

「（ひとつのきっかけ）」 2000
w172×d93×h111mm
木・鉛
個人蔵

"(Dazzling and cold mind)" 2000
wood and lead plate

「（まぶしくてつめたい思い）」 2000
w380×d180×h96mm
木・鉛



"Landscape of the premonition"

Jin Session 2001 Vol.2

「予感の風景」 2001.3.17~27 Gallery Jin 5人展



「予感」とは主観的で個人的な出来事です。
「なんだか予感がしない?」と人に共感を求めるよう
なことは あまりないと思います。
でも、誰もが感じることのあるものです。

"Before a sign" 2001
wood and lead plate

「兆シノマエニ」 2001

w240×d85×h240mm

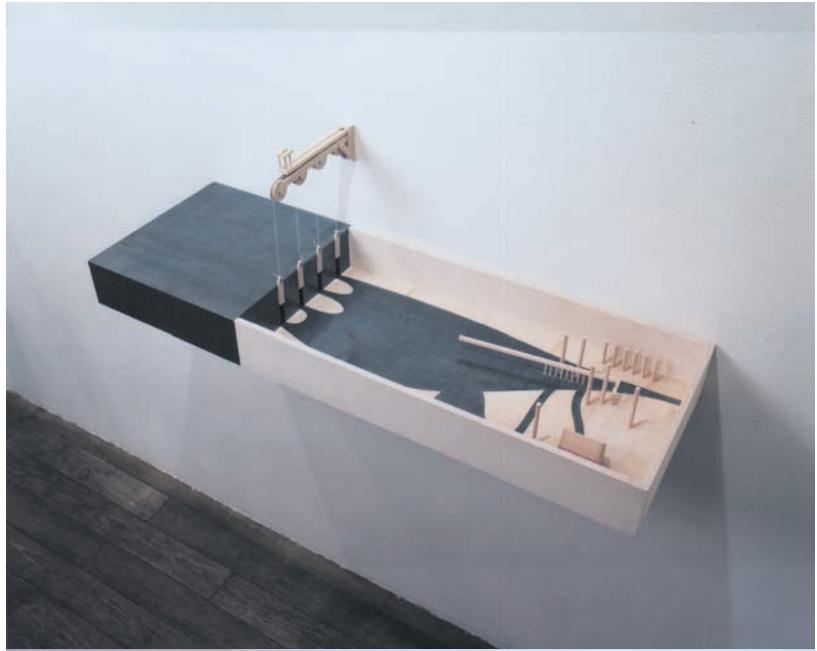
木・鉛

個人蔵



"Landscape of the premonition I" 2001
wood, lead plate, and cotton yarn

「予感の風景 I」2001
w900×d300×h255mm
木・鉛・糸



from this side
"Landscape of the premonition II-i" 2001
wood, lead plate, and cotton yarn

「予感の風景 II-i」2001
w375×d400×h1050mm
木・鉛・糸

"Landscape of the premonition II-ii" 2001
wood, lead plate, and cotton yarn

「予感の風景 II-ii」2001
w375×d400×h480mm
木・鉛・糸



"Pool above the head"

「頭上のプール」 2001.10.17～11.2 ギャラリー椿



私にとって箱は、内側の世界を表すための形態です。

ひとりでいる時や、ひとりで思うこと、ひとりで見ることを大切に思ってきました。

そんなひとりのための空間に
同化することのまだない
他者ともいべき外界のイメージが
頭上に現れました。

箱は
それを拒むことなく
無理に収めようとしてもなく
静かな出会いを待ちながら
制作されました。



"To stand alone" 2001
wood, acrylic plate, and film

「ひとりで立つために」 2001
w500×d300×h105mm
木・アクリル・フィルム
個人蔵

"Before making it words" 2001
wood, acrylic plate, and film

「言葉にするまえに」 2001
w500×d300×h105mm
木・アクリル・フィルム





"Preparations for encounter III" 2001
wood, acrylic plate, and film

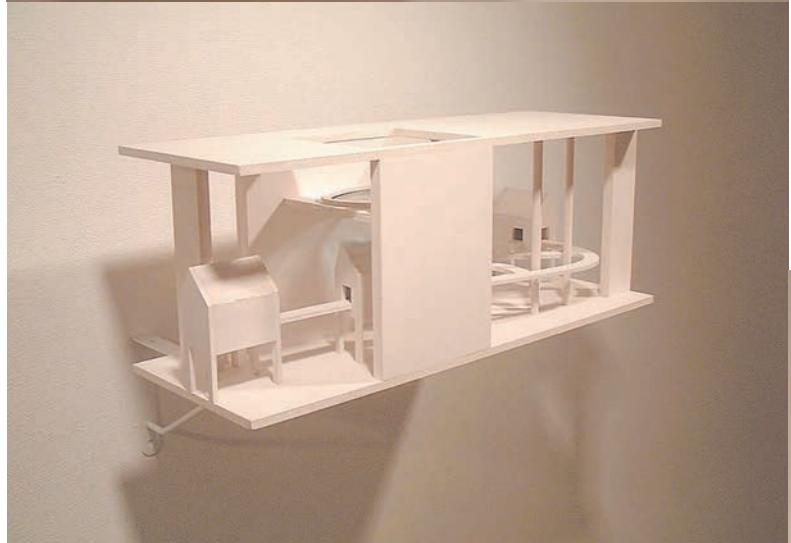
「出会いの準備 III」 2001
w380×d260×h132mm
木・アクリル・フィルム

"Some entrance I" 2001
wood, acrylic plate, and film

「いくつかの入口 I」 2001
w400×d140×h152mm
木・アクリル・フィルム
個人蔵

"At a sunk place I" 2001
wood, acrylic plate, and film

「沈んだ場所で I」 2001
w200×d200×h300mm
木・アクリル・フィルム
東京オペラシティアートギャラリーコレクション 蔵



"Pool above the head II · while waiting for the light"

「頭上のプールII・光を待しながら」 2002.1.27~2.5 松明堂ギャラリー(鷹の台／小平市)



ひとりでいる時や、ひとりで思うこと、ひとりで見ることを大切に思ってきました。

そのような瞬間に訪れるいろいろなイメージを、
きちんととかたちに表すことができたらと思っています。



this side

"A work of the beginning" 2002
wood, acrylic plate, and film

「初めのはたらき」 2002

w700×d175×h700mm

木・アクリル・フィルム

from the left sequentially

"A position of the beginning" 2002
"(The blank that was supplemented
with another thing)" 2002
"(The past that collapses)" 2002
wood, acrylic plate, and film

「初めの位置」 w700×d110×h700mm

「(別のもので補われた空白)」 w700×d190×h700mm

「(潰えていく過去)」 w700×d56×h700mm

木・アクリル・フィルム



"(Classified things waiting
for a measurement)" 2002
wood, acrylic plate, and film

「（計量を待つ分類されたものたち）」 2002
w400×d400×h350mm
木・アクリル・フィルム

"While waiting for the light i" 2002
wood, acrylic plate, and film

「光を待ちながら i」 2002
w400×d400×h400mm
木・アクリル・フィルム



"Route above the head" at "Kanda Soba art festival"

「頭上のルート」 神田そばあーとフェスティバル 出品 2002.10.19~27 満留賀(神保町／東京)



展示によせて:

この展示のお話を頂いた時には、私にいったいお蕎麦屋さんで何ができるだろう?と見当もつきませんでした。初めて満留賀さんに伺って、お蕎麦を待っている間、ふと見上げた天井の曲線で窓んだかたちをみて、日常からちょっとだけ異世界に旅するきっかけを見つけたように思い、制作しました。

美味しいお蕎麦で食欲を満たすという、生活の基本的な行為と、その場で私の作品を見るとのちょっとしたズレを楽しんでいただけたら幸いです。

"my home"

2003.3.24～4.10 ギャラリー椿

人間は血・肉であり、土である。

大地が隆起して山となり、その土は豊かである。
今はまだその山を登らざともよい。
(この上方への視点は、地下からの地上へのものとは異なる。)
豊かな土の塊を身近に感じながら
過ごせばよい。



私は箱を用いて内側の世界を表してきました。
箱は内側を自由に解放するために有用です。
社会生活の中で被ったままになっている表皮の代わりを
箱の外壁が担ってくれるため、
その中では無防備になることができるからです。

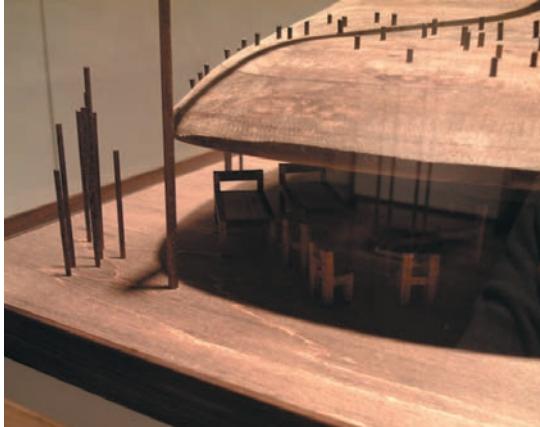
今回のテーマは my home 。
家族・命・生活・私に関する興味が呼び寄せたイメージについて制作しました。
とくに、娘の誕生を経て、内としてのつながりが強く、
しばらく心的・肉体的に分離出来ない状態にあったという体験が影響しています。
繁殖といふ生物としての本能的な経験は、
多くの時間を理性的に過ごしている人間にとって、
自分の中に埋没していたイメージを、強く振り起こさずにはいませんでした。
それは、母子の分離が私には難しかったということだけでなく、
肉体と精神(頭脳)は分離出来ないことを知つてはいるも、
肉体の生活について、あまりにも意識的でなかったことの振り返しでした。
分離、分化できずに在ることが自然な様であることを
きちんとわかったように思います。

物事を観察し、把握し、分析し、思考するために、
未分化の状態から、分化していくことはあたりまえの仕方であり、
これまでの知の発展の流れだと思います。
一方で、神に近付く(接神)ために
万物の無限で未分化な状態、はじまりの瞬間へと
戻っていくことを目指す衝動が存在します。

未分化な状態からでしか、見えない景色があることを感じています。

"mh-serene contemplation" 2003
wood and acrylic box

w400×d400×h280mm
木・アクリルボックス／個人蔵



"mh-a distant summit" 2003
wood and acrylic box

w400×d400×h420mm
木・アクリルボックス／個人蔵



"mh-recurrence" 2003

wood and acrylic box

w400×d400×h310mm
木・アクリルボックス／個人蔵



"mh-primitive mother" 2003

wood and acrylic box

w400×d400×h400mm
木・アクリルボックス／個人蔵

"mh-previous night" 2003

wood and acrylic box

w250×d250×h180mm
木・アクリルボックス／個人蔵



"my home II"

2003.6.30～7.5 画廊 編(大阪)



"mh-the night before the interview" 2003

wood and acrylic box

w208×d208×h212mm

木・アクリルボックス



"mh-blood" 2003

wood and acrylic box

w620×d270×h282mm／木・アクリルボックス

"mh-dome-i" 2003

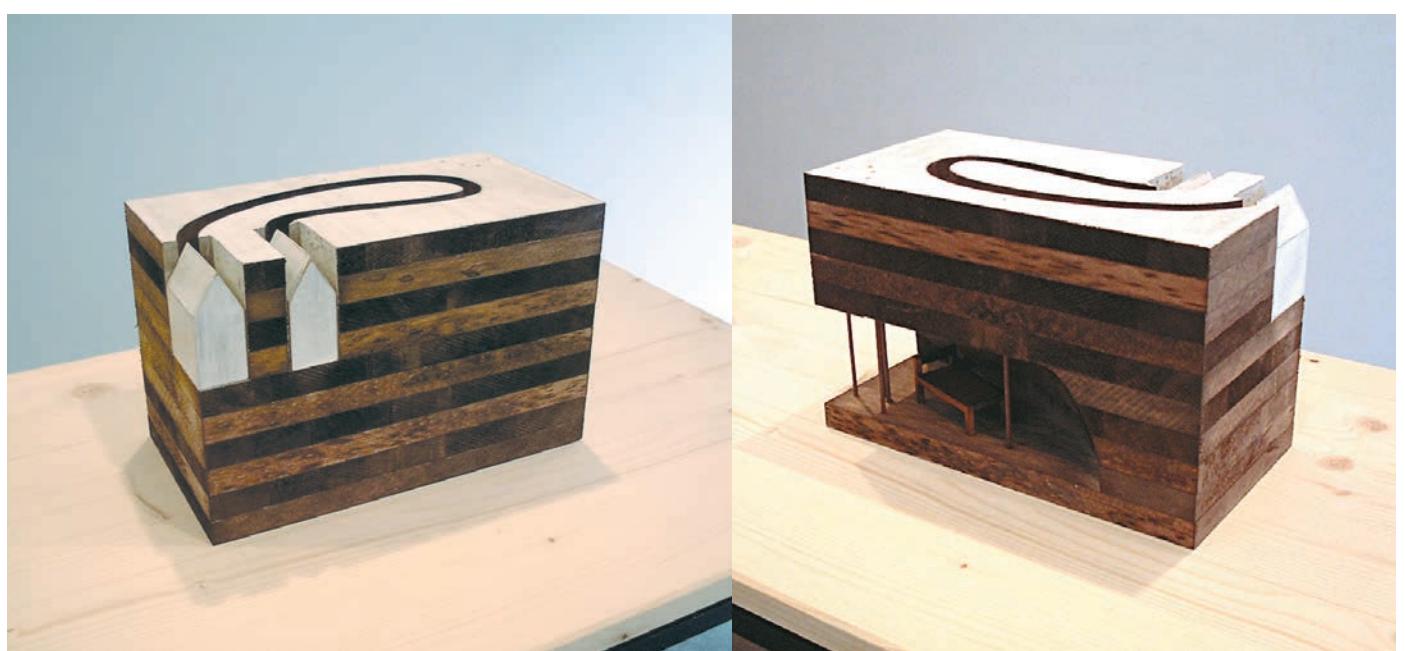
wood

w100×d100×h117mm／木

"mh-dome-ii" 2003

wood

w210×d110×h135mm／木／個人蔵



"Mountains and Tunnel"

「山と隧道」 2004.11.18~30 楽風(浦和)



"Mountains and Tunnel h" 2004
wood, clay, and building model materials

「山と隧道h」 2004
w200×d200×h220mm
木・粘土・建築模型材料

"Mountains and Tunnel p" 2004
wood, clay, and building model materials

「山と隧道p」 2004
w260×d450×h340mm
木・粘土・建築模型材料

^{ずいどう}
「隧道」とはトンネルのことです。

初夏に奥多摩の鳩の巣へ行きました。帰りの駅の歩道橋から帰路を背にして見ると、線路の先にトンネルがありました。山にまっかりあいている穴が、とても魅力的にみえたのです。

交通の便宜上掘られたトンネルを、電車や車で通る経験は今まで何度もありましたが、山を神聖なものと考えても、魔物の住処と考えても、その塊の内部を通ることを意識することが、必要な儀式のように思えたのです。

前回の京橋での個展では、「土と肉」への近親感から「山」をつくりました。それは内なる世界の山でした。鳩の巣で目の前にした山によって、外の世界の山、眼前に聳え立つ大きな山と対峙させられ、内なる山と外の山の意味合いは、私の中で流動的に交錯はじめています。

"Mountains and Tunnel n" 2004 wood, clay, and building model materials

「山と隧道n」2004

w250×d380×h340mm
木・粘土・建築模型材料／個人蔵

"Mountains and Tunnel c-1" 2004 wood, clay, and building model materials

「山と隧道c-1」2004

w230×d330×h240mm
木・粘土・建築模型材料／個人蔵

"Mountains and Tunnel c-2" 2004 wood, clay, and building model materials

「山と隧道c-2」2004

w230×d330×h240mm
木・粘土・建築模型材料



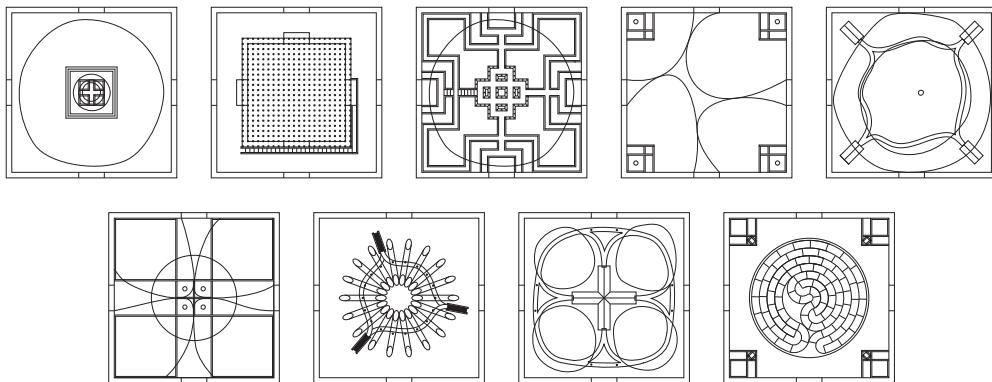
"the fullness and the emptiness"

「充满と空虚」 2005.7.4～16 ギャラリー椿



私は、自身の内なる世界と外の世界を重ねて觀ようとしています。すると、自然と神殿や教会、修道院といった信仰の場のイメージに行き着いてしまいます。具体的な宗教を持たない私にとって、神のような存在を感じることがあるとすると、その空間は、何かにいっぱいに満たされているか、または、全くの空虚であるように思われるのです。

反対の意味を持つ二つの言葉ですが、同じ意味と価値を持つ瞬間の感触をつかまえたいと思い、制作しました。



1. "Waiting"
「待つ」
2. "About how to go"
「行き方について」
3. "Radiator of the four corners"
「四隅の放熱器」
4. "Circulatory organ"
「循環器」
5. "Sacred mountain"
「聖なる山」
6. "Border area"
「境界域」
7. "The fullness and the emptiness"
「充满と空虚」
8. "Answer to four direction"
「四方への応え」
9. "To enter"
「に入る」

w400×d400×h346mm
木／1:個人蔵

9. 7. 5. 3. 1.
8. 6. 4. 2.



写真左から:作品外観／作品内部「待つ」「充満と空虚」「行き方について」「聖なる山」 左下図:作品平面図 全ての作品サイズ:400×400×346mm／素材:木

「奇蹟を容れる器」

中島 智

コイズミさんの「箱」には物語になる以前の、信仰対象のない純粋な祈りのような、不思議な浮遊感があります。彼女の作品は物理的にはしっかりと作り込まれていて、堅牢な構築物のように他者を容易に寄せつけないように見えますが、その造形技術の向こう側から響いてくるものは、宙吊りの、安易に何かに帰属しない心の在り方なのです。もっとも彼女の場合、既成の枠組みに「ピッタリくるものが見付けられない」と違和感を抱かせるような、その非幾何学的かつ生理的な感受性がそれを可能にしているのです。この点に関してコイズミさんは、ブルーノ・タウトの「未知の信仰のための空の器」という言葉に出会ったとき、「何か自分の内と書きあうものを感じた」と述べています。

彼女は「私がどういうときに信仰と言えるようなものを感じるか」といって、ひとりで自分と出会うときだと思う。ひとりで何かと出会ったり、ひとりで何かを見たりするときが、一番余計なもの何も無くなつた状態になれば、そこで何かを感じられたら、自分が祝福されているようなやさしいきもちになる」と述べるように、「余計なもの」である意味や装飾によって権威化される信仰性とは異なる、感性そのものの祝福を享受されているようです。また『Destination』(1999)では、「内側に 行き先もわからないままの気持ちがあつて すべてが間であつて まったく迷っているようでもあり すべてが光であつて 決して間違えないようでもある そんな『行き先』を、矛盾を含めたままで、つづってみる」と述べ、カオスモスで両義的な心理世界を優劣なく渾然と引き受けるような主体との向き合い方をされていることがわかります。実際、こうした宙吊り状態に耐えられる人というのは、性急に自分が何者であるかを問うことのナンセンスを見破っているわけです。そこではDestination(行き先)は、幽玄にもdestine(運命づけ)られたものとして確信されるものかも知れません。言い換れば、それは自らを一元化してしまう(意識的な意味による自己救済)という日常的慣習から、自己(主体)に超脱することで、深層心理学が注目してきたような(無意識ゆえに意味のある場所)に自己委譲をおこなう、アート本来がもつテクネーなのかも知れません。

アートとは世界を肯定する技術です。それは「無為」のスタンスで「制作」に携わることを可能とするものです。「無為」のスタンスとは、絶え間ない世界(=自己)の変化そのものに意識レベルを超えた深い必然性を直觀し、そこに生体レベルとも形容しうる絶対的な信頼を置くことによって可能となるものです。ところが、いわゆる社会的アイデンティティや価値、信念などによって安堵感を得ようとする人々は、世界(=自己)というものを一般原理や倫理によってイデオロギカルに固定化することで捉えようとしています。このことが近年においては、「ひとりで見る」勇気のない人々の拠り所である「公共性」という概念を肥大化させる要因にもなっています。しかしながらコイズミさんの場合には、絶えず変化しつづける世界の多元的なアリティを看取されることで、そうした表層的な文化イデオロギーというものが、実は何らかの社会的カムフラージュでしかないことや、皮肉にもそのカムフラージュによって逆説的に保護されてきたテクニーの領域(の奇蹟性)についても看取されておられるようです。ゆえに彼女の「箱」は、公共性を纏った視線をかわす効果こそあっても決して封印のための器ではなく、譬えるなら茶室が実現してきたような出会いのための装置なのです。

「ひとりでいる時や、ひとりで思うこと、ひとりで見ることを大切に思ってきました」と彼女は言います。しかし彼女は「ひとり」ではないことを知っているからそれを楽しめるのです。現在、コイズミさんは、無意識の化生でもある身体性と、その身体がコミュニケーションする世界との〈内の共感〉を通して、連続性を捏造する歴史学とはまったく異なる、不連続な主体の時間軸に、新たな「未知の信仰」を予感されています。すなわち、この〈官能の共感〉を通して、もはや個とは呼べない主体が拡張されていくなかで、コイズミさんの近作にはランドスケープを包括する未知なる地平、未知なる時間軸が胎動を始めているのです。全ては連繋し、全ては変化する、そんな生態学的なムスピのなかで明滅する自己に、与えられた大切な場所。そんな彼女の「箱」は、ゆったりと深呼吸をするように、他者に開かれるのです。

(ナカシマ サトシ／造形作家・芸術人類学研究)

"the fullness and the emptiness, and a small passage of one nothing"

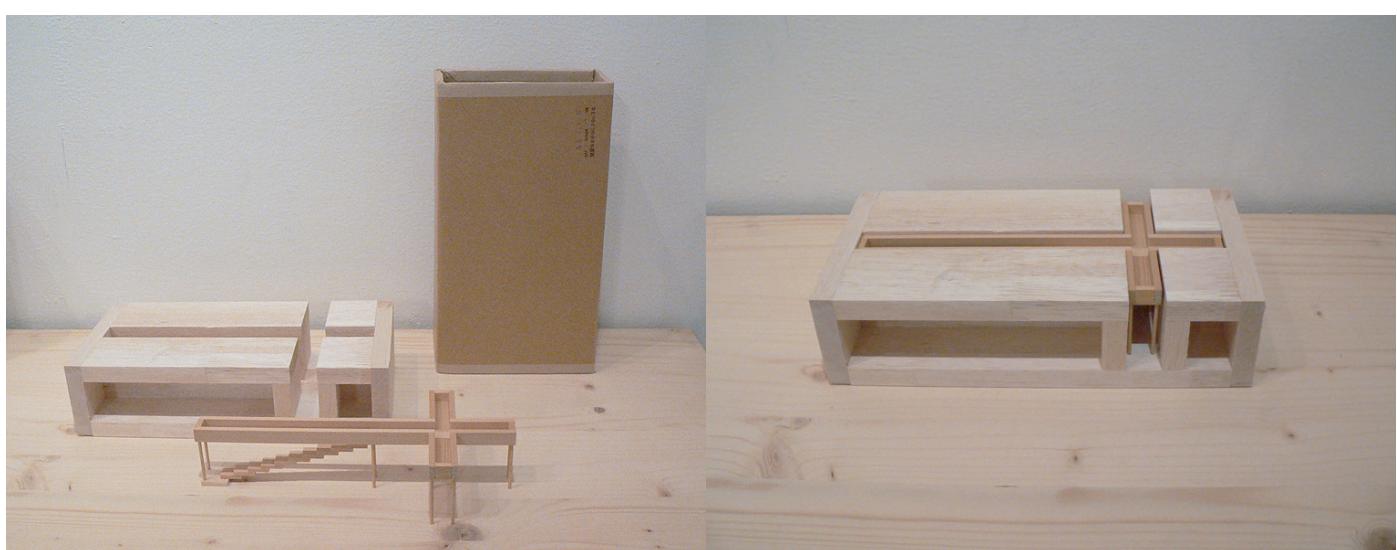
「充满と空虚とひとつひとつの小さな通路」 2005.11.14～26 画廊 編

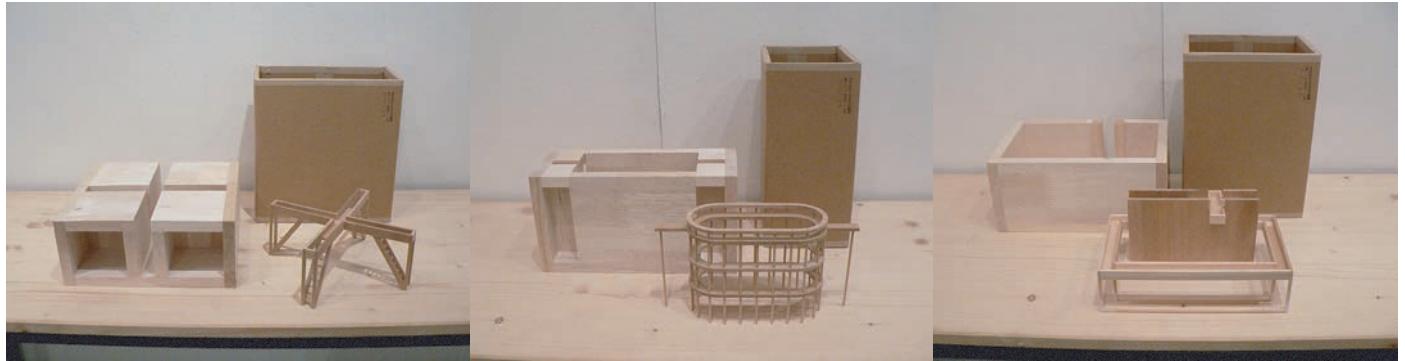


"A small passage of one nothing 001" 2005
wood and corrugated cardboard／ed.10

「ひとつひとつの小さな通路 001」2005

各ed.10 ／ 木・ダンボール





"A small passage of one nothing 002~004" 2005

wood and corrugated cardboard

ed.10

「ひとつひとつの小さな通路 002」

「ひとつひとつの小さな通路 003」

「ひとつひとつの小さな通路 004」

各ed.10 / 木・ダンボール

"It accompany air space

001~003" 2005

wood and corrugated cardboard

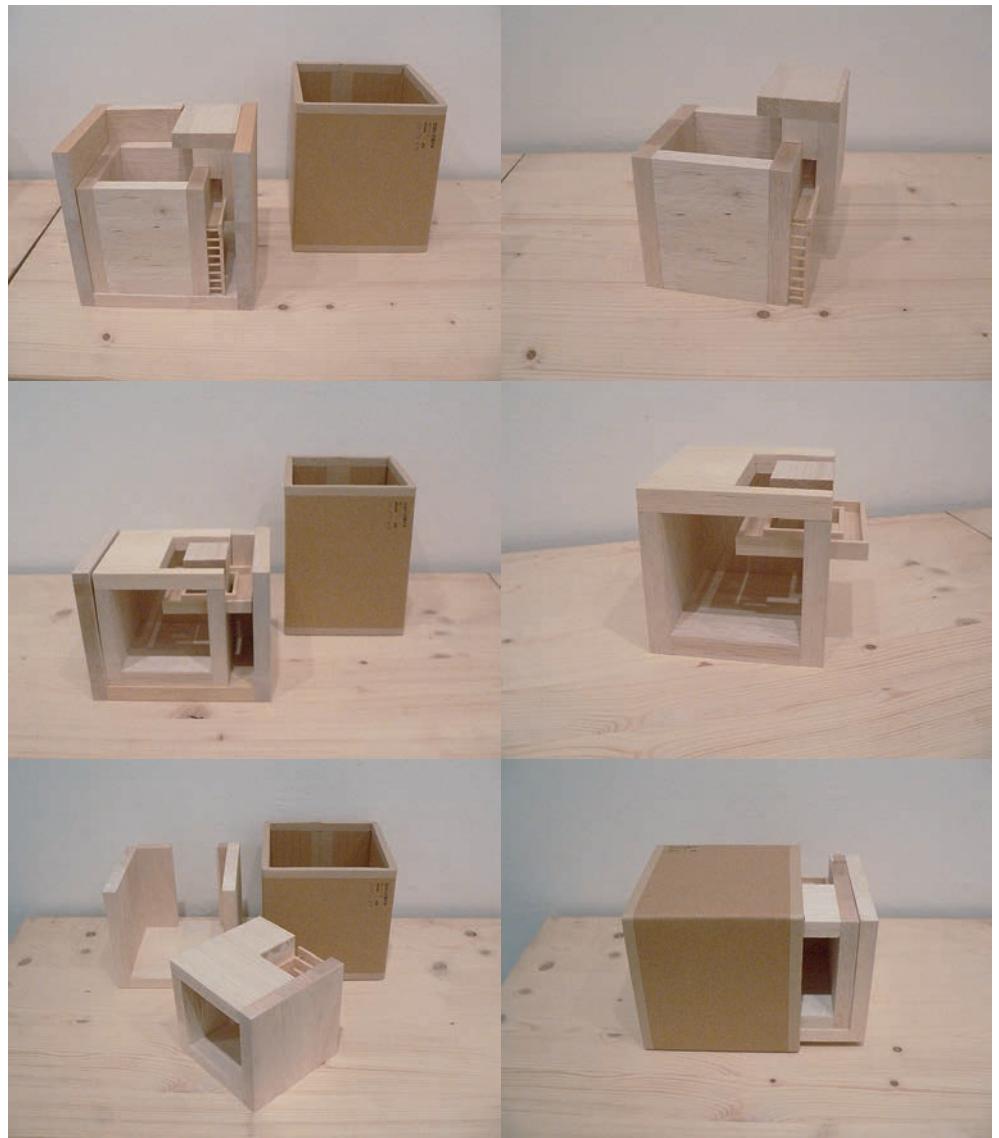
ed.10

「空間に付随する 001」2005

「空間に付随する 002」2005

「空間に付随する 003」2005

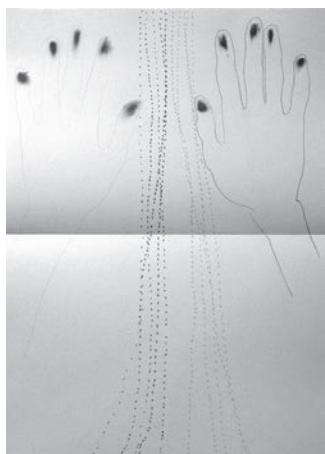
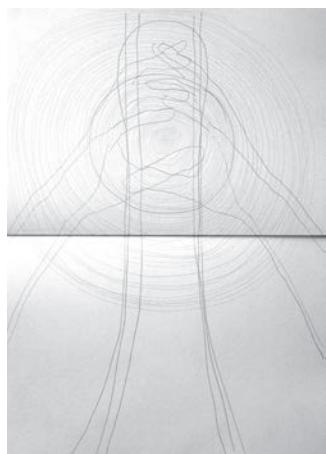
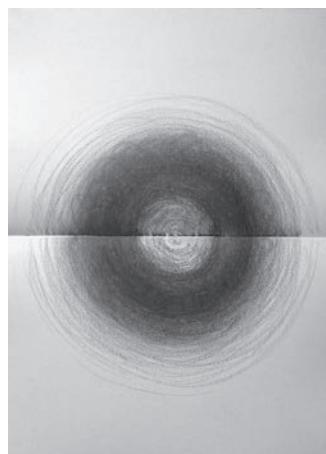
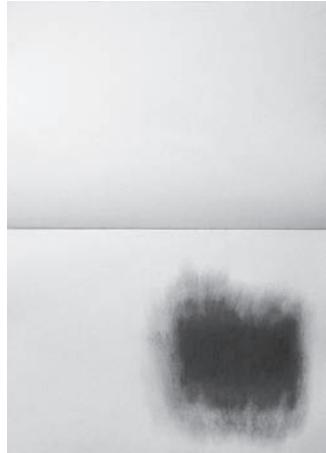
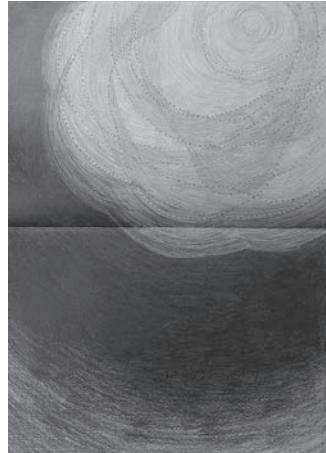
各ed.10 / 木・ダンボール



"close your eyes to feel the body"

「目を閉じる 身体を意識する」 mixiドローイング研究所・ドローイング展出品作

2006.3.30～4.4 switch point(国分寺)



目を開いていると

いつもの視点(目の高さ)から

いつも見る風景

目には自分が所有しているもの

選んだものたち

自分の手足、服

自分にちなんだものたちが映っている。

それらを目についていることが

私を認識させ

我を形成する手助けになる。

しかし、私というものや我という存在自体も

希薄になるように思える。

自分の形は人型のような実際に

計測可能な絶対的な大きさをもったものとしては

感じられなくなる。

確かに脳天や手、腹などのヶ所は感じられるが

全体としては形や大きさのさだまらない

まあるものに思えてくる。

そしてさらに私という記憶のようなものからは遠ざかる。

(それでもまだ個のレベルにとどまっているが)

目を閉じると

それらは見えなくなる

閉じた状態に思える

視覚的には外界から遮断される

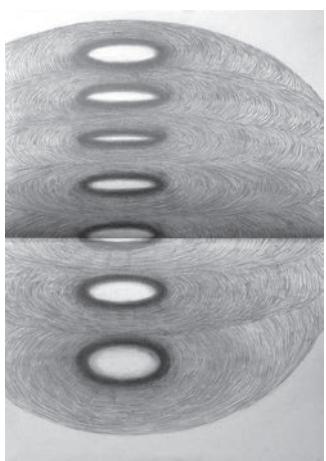
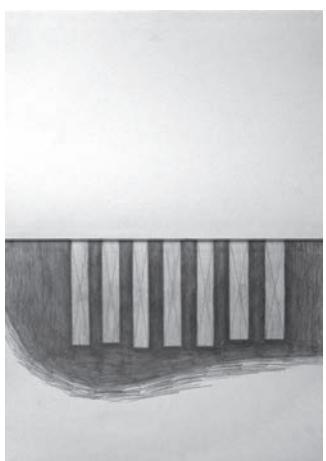
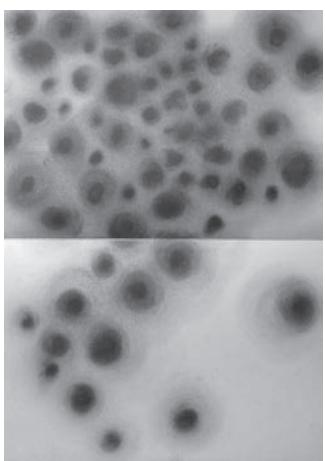
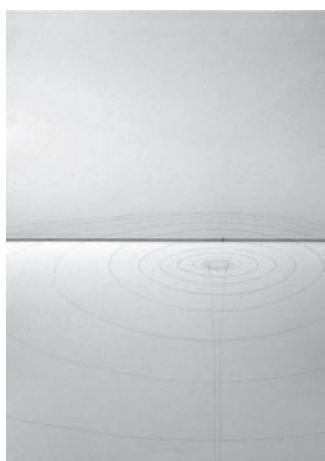
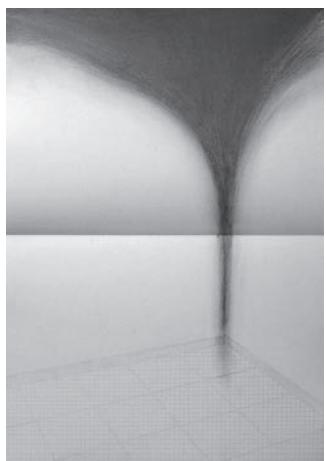
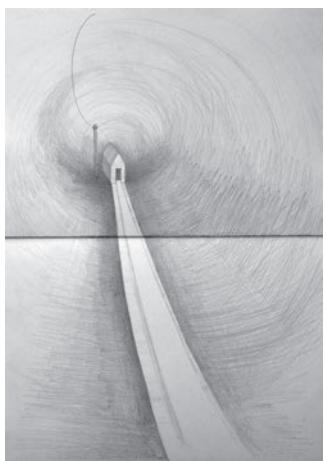
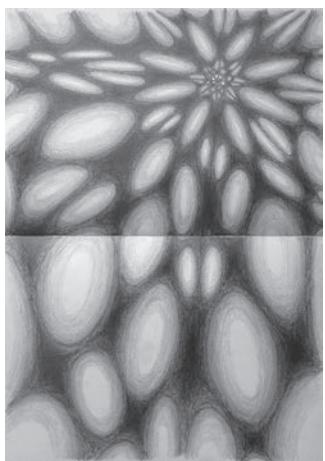
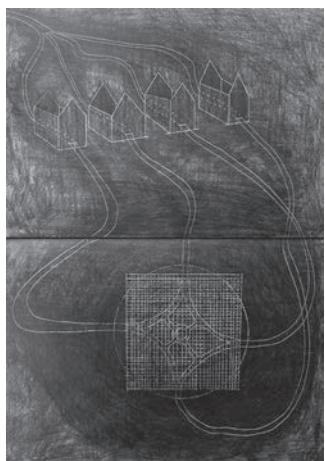
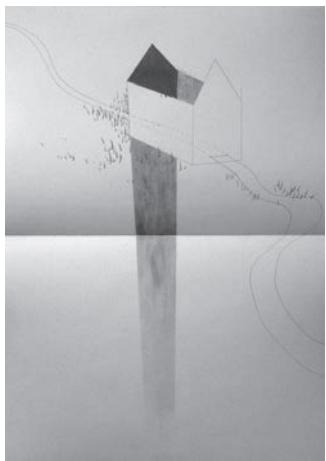
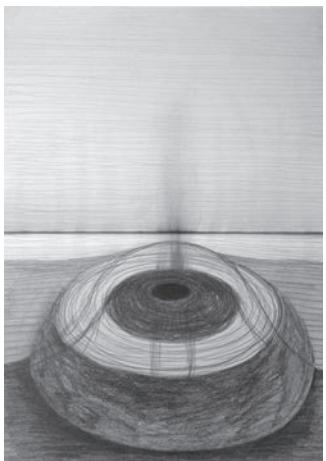
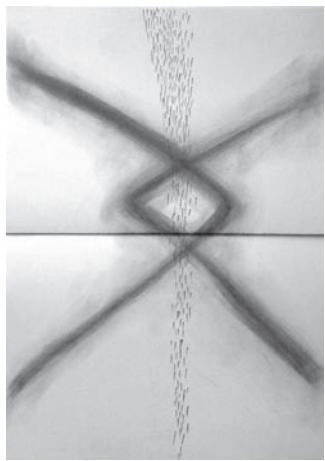
内にこもる作業。

"close your eyes to feel the body" 2006
pencil on a sketchbook

「 目を閉じる 身体を意識する 」 2006

image size: A3

鉛筆・A4スケッチブック



"Small vehicle"

「チイサナノリモノ」 ミツマタ制作室展出品作
2006.11.8～12.5 喫茶シントン(鷹の台／小平市)



チイサナノリモノ ガ
ヒトツ ホシイノ

ワタシニチョウド
イイノガイイワ
ワタシニチョウド
イイノナンテナイワ

イエイエ
キット アルケド
ワカラナイワ
イツマデタッテモ
ワカラナイワ

手のひらにのる小さな作品を手にとって、
同じ番号の紙箱に入れて持ち帰ってもらう
展示即売の形式をとりました。
ほかに全作品の実寸図面青焼きの小冊子も展示しました。



"Small vehicle no.001～no.020" 2006
wood, cardboard, and paper

「チイサナノリモノ no.001～no.020」2006
w22～76×d16～80×h10～40mm
木・厚紙・紙

"house as a body"

「身体という家」 新作家たち selection 展 VOL.2 (4人展/小川陽一郎・立川公子・柳揚大)

2007.2.4~18 松明堂ギャラリー



心のかたちについて模索していたら、
山と家のモチーフがよく出現するようになりました。
それらは私にとっては、身体のかたちのように思えます。
心と身体は不可分である以上に、おんなじものかも知れません。

from the left sequentially

"a piece of a home as a body 01" 2006 wood
"a hill" 2007 wood

"mountain and home 01" 2006
wood and acrylic box

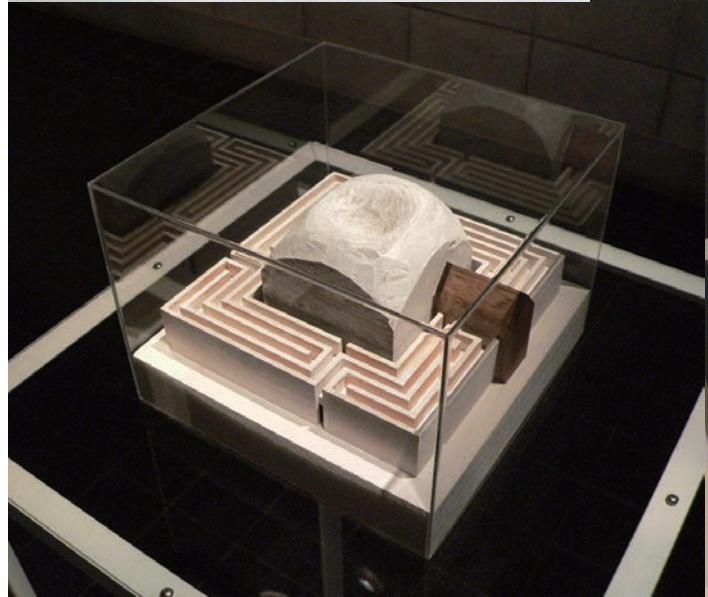
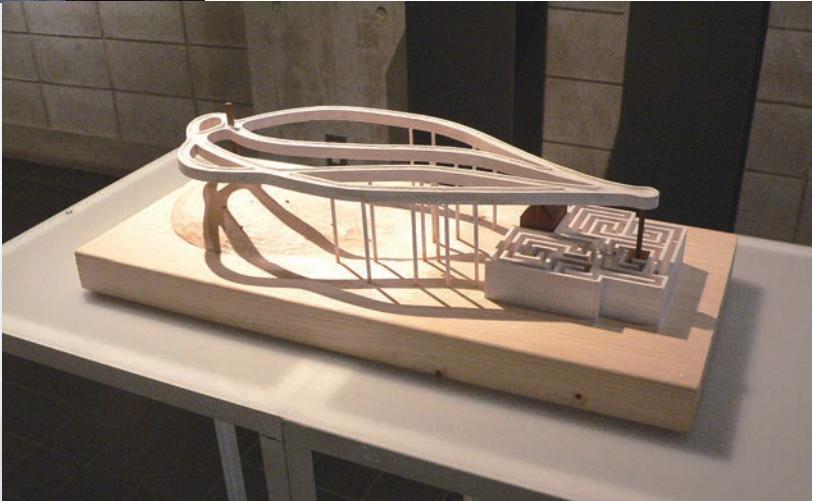
"mountain and home 02" 2007
wood and acrylic box

「a piece of a home as a body 01」 2006
w200×d110×h105mm 木

「丘」 2007 w506×d234×h134mm 木

「山と家 01」 2006 w200×d200×h150mm 木・アクリルボックス

「山と家 02」 2007 同上／個人蔵





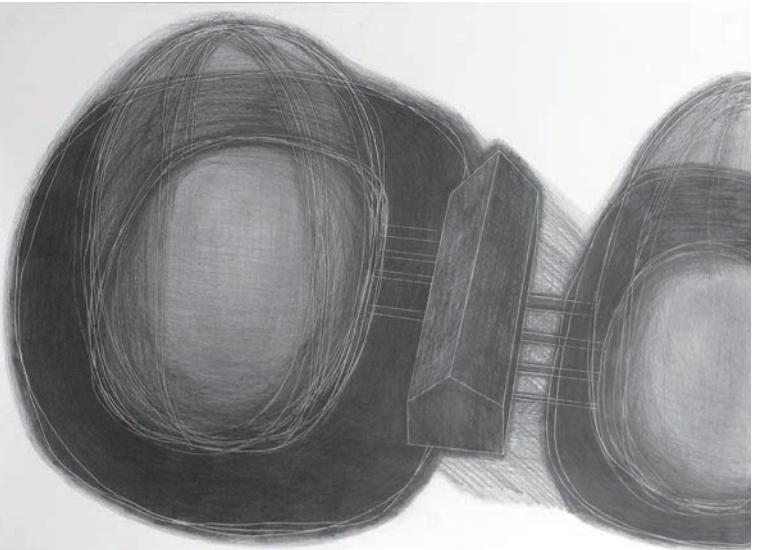
the left

"Container and Lump 01" 2007 wood
"Container and Lump 02" 2007 wood

「器と塊 01」2007 w197×d132×h167mm 木
「器と塊 02」2007 w157×d132×h167mm 木

the right

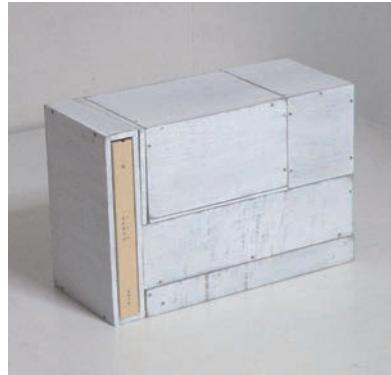
"a visceral cavity 01" 2007
"a visceral cavity 02" 2007
pencil on paper
w660×h480mm 鉛筆画
"a visceral cavity 03" 2007
pencil on paper
w340×h470mm 鉛筆画



"SHOMEIDO [paperback] - original book jackets & book objects"

「松明堂『文庫』展 オリジナルカバーとブックオブジェ」

2007.11.10~12.9 松明堂ギャラリー



文庫化されている好きな作品にオリジナルのカバーやブックオブジェ
を制作するという企画

(他出品作家)

荒木珠奈・石塚雅子・川崎正治・今井俊・梅田恭子・大輪眞之
小川陽一郎・尾田美樹・小原馨・柄澤齊・北見隆・木下恵介
木下晋・木村繁之・小島敏男・古渡章・作田富幸・佐藤三千彦
多賀新・高橋千裕・建石修志・友川カズキ・野坂徹夫・宝珠光寿
宮崎敬介・宮本武典・山田隆志

"[DAS SCHLOSS] F.Kafka" 2007 wood, wire, acrylic plate, lead ball

「『城』カフカ」 2007

w402×d295×h164mm(開いた状態のサイズ)
木・ピアノ線・アクリル板・鉛玉

"[SIDDHARTHA] H.Hesse" 2007 wood, chain

「『シッダールタ』ヘッセ」 2007

w164×d106×h275mm 木・鎖

"[Shio-tsubo no saji] KURUMATANI Chokitsu" 2007 wood

「『鹽壺の匙』車谷長吉」 2007

w256×d121×h300mm 木

"[THE BODY] YUASA Yasuo" 2007 paper (digital-print)

「『身体論』湯浅泰雄」 2007

文庫本カバー 紙(デジタルプリント)

"Planning Note - Architect × Artist"

「構想ノート展」 2007.12.17~22 ぎゃらり かのこ(大阪)



普段みることのできない、構想の過程をみると
今まで分からなかつた作品を理解しようという企画。

同規格のファイルボックスを使用することが規定。

(他出品作家)

前半12/10~11

前 + 12/ 10 - 15

建築家：賀志雅樹・吉村篤一・南浦琢磨

アーティスト:高原和子・ハセガワアキコ・磯崎春子・島崎修・飯田真人

後半12/17~22

建築家:東野忠雄・新田正樹・宮武慎一・青砥聖逸

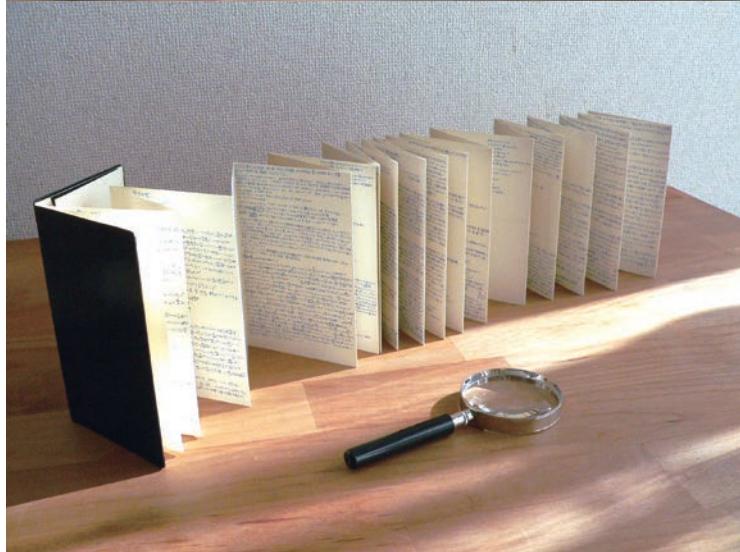
アーティスト:樋口尚・西藤博之・蒲生孝志・杉本良一

"Planning Note" 2007(editing)
file box, drawing, blueprint
a pocket notebook, a magnifying glass

「構想ノート」2007(編集作業)

「構念」 11 2007 (編集作業) 200×136.3×1.310 mm

w290×d363×h310mm
ファイルボックス・図面・書類・毛帳・虫眼鏡

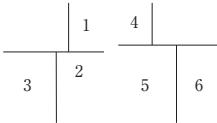


"the inside of a scab / a place of the autonomic function" (kasabuta no naka)
「瘡蓋の中」 2008.11.21~30 Gallery Jin(谷中)



小さい頃から瘡蓋をはがすのが好きで、硬くなった皮をむく時の感触と、まだかわききらない、湿気を帯びた新しい皮膚の美しさに驚かされます。瘡蓋の中では、私の意志とは関係なく、自律的に増殖と再生が行われます。そのように私の我から少し離れたところで行われる作用を信頼して制作に向かいたいと思っています。

私は主に、箱形の作品を多く制作してきました。箱は内側を持っていて、外から守られているため、無意識的なものの表出に有効な形です。今回は箱という形の代わりに、「瘡蓋の中」という内側の自律的な場所のイメージをきっかけとして、細胞が皮膚や身体を構成しているように、単純なパーツの集積による構造体を制作しています。いくつも同じパーツをつくるという無為の作業の先に、信頼に足る美しく神聖な場所の出現を願って。



1,2 "the inside of a scab /a place of the autonomic function"
2008 wood, wire, metal fittings

「瘡蓋の中」2008 w1200×d750×h800mm 木・ピアノ線・金具

3 "the circle" 2008 wood

「円環」2008 w724×d90×h724mm 木

4 "crown" 2008 wood, wire

「crown」2008 w120×d120×h90mm 木・ピアノ線

5 "proliferation" 2008 wood, metal fittings

「増殖」2008 w150×d606×h242mm 木・金具

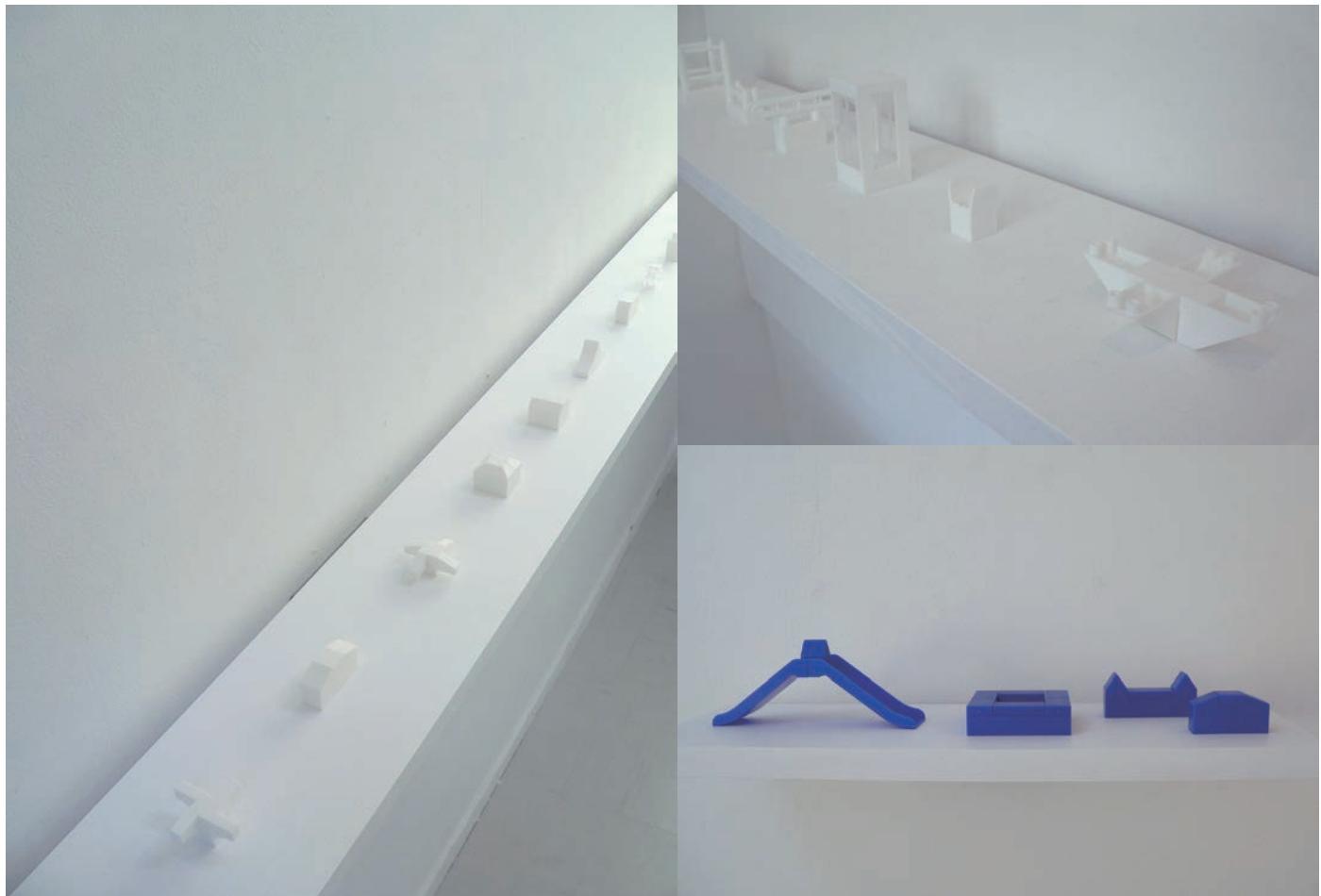
6 "tower" 2008 wood, wire, metal fittings

「塔」2008 w480×d480×h134mm 木・ピアノ線・金具



"monad"

同前頁 :「瘡蓋の中」 2008.11.21~30 Gallery Jin(谷中)



モナド【monad】について

ブロックは普通、何か具体的なモチーフの再現を目指して用いられる。
乗り物・建物・動物・何かのシーン 等。
その目的のよりよい再現を目指して、パーツが選ばれ、組み立てられていく。
ブロックで遊んでいて気がついた。

目的を持たずに、そのパーツの形にできるだけ自然な姿勢で従って、
組み合わされるパーツを選び出し、組み立てていくという方法はどうだろう?

まず、1つのパーツを選んでからはじめる(出発)。

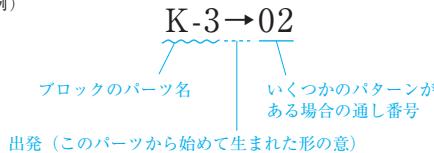
- ①そのパーツが呼び出す他のパーツを探す(突起の数や配置によって、自ずと限定される)
- ②単純要素としての組合せ(シンメトリックの多用・複数使用)
- ③自立的強度を持たせるための組合せ(レンガを積むときのような)
- ④単純で無理のない形・美しさ

"monad series" 2008 Diablock

「モナド シリーズ」 2008

ダイヤブロック(既製の子供玩具)

タイトルについて
例)





左)組み立てられた状態
右)使用パーツ

"Room next to mine"

「隣の部屋」 2009.11.7～21 ギャラリー椿・GT2



"Room next to mine_Cross" 2009／wood

「隣の部屋_十字架」 2009
w110×d231×h190mm 木／個人蔵

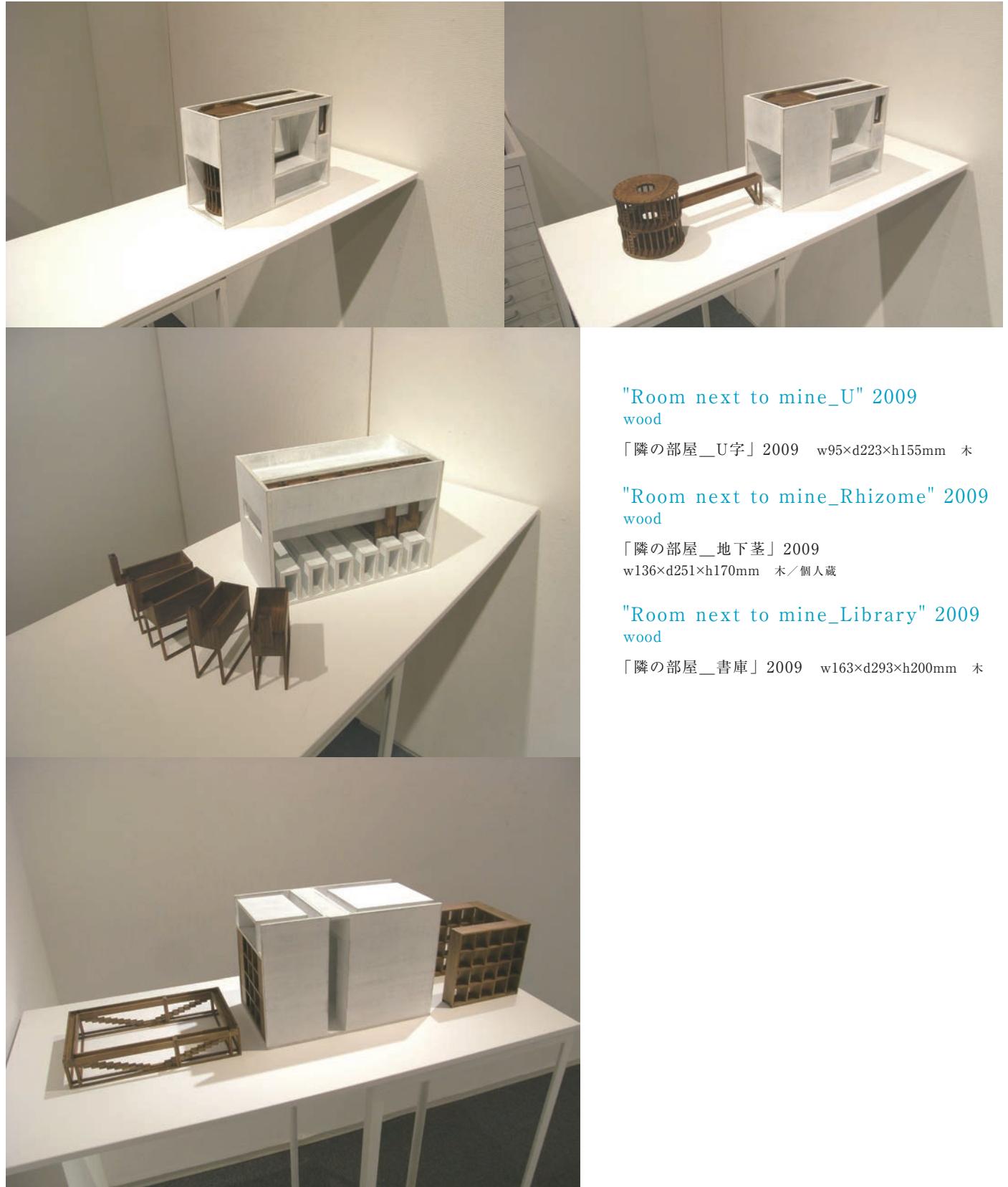
ものごとを空間的に感じる。

物語を読んでいるときも
思想・宗教的なものを読んでいるときも
話を聞いているときも
記憶をたどっているときも
何かについて話しているときも
作文を書いているときも
自分なりの空間が広がっていく。

通路ができる
階層が現れ
外側がみつかり
裏側に出たり
道がつながり
行き方のわからないような入り方をしたり
遠いものがすぐ近くだったことに気づいたりする。

そんな空間を生む
かたちのことを想って。

白い箱に収められている茶色いパーツは、全て取り出すことができる
来場者に自由に出したりしまったりしてもらった。



"Room next to mine_U" 2009
wood

「隣の部屋_U字」2009 w95×d223×h155mm 木

"Room next to mine_Rhizome" 2009
wood

「隣の部屋_地下茎」2009
w136×d251×h170mm 木／個人蔵

"Room next to mine_Library" 2009
wood

「隣の部屋_書庫」2009 w163×d293×h200mm 木

"I go far away and return.

Building the tower / Overflow (imagine the state that the water of the glass overflows)"

「遠くに行って 帰ってくる。 - 塔を建てる ／ Overflow (カップの水があふれる様について)」

2010.9.21～10.3 GALLERY ろば屋(新潟)



"tower of the circular" 2010
wood

「周回的な塔」 2010
w180×d180×h252mm 木



"untitled" 2010
wood

3点共に
「Untitled」 2010 木・ピアノ線など／個人蔵



"Overflow_basin" 2010
wood, wire, thin Japanese paper, cheesecloth

「Overflow_水盤」2010
w164×d257×h98mm - w390×d257×h164mm
木・ピアノ線・鉄線・雁皮紙・寒冷紗



"Overflow_ice and snow" 2010
wood, wire, metal fittings

「Overflow_冰雪」2010
w164×d257×h98mm - w328×d257×h49mm 木・鉄線・金具



Overflow_氷雪
木・鉄線・金具

"Structure / Overflow (imagine the state that the water of the glass overflows)"

「組み立て／Overflow (コップの水があふれる様について)」

2011.7.23～8.6 ギャラリー椿



子どもの頃から工作が好きだった私にとって「箱」というからは親しみ深いものです。

贈答用の箱を開けたときに、整然と隙間なく並ぶお菓子は美しく、また、不要になって私の作品の材料として手元に残った空箱の「空の空間」は、これから何かを入れられる、またはどこかを加工される予感と期待で満たされた空間でした。

それから、本のかたちの候姿として。本の中には(開く度毎に)まだ知らない奥窓し続ける空間がしまい込まれています。

そしてその中に入り込む。

「組み立て」の箱のかたちは、内側のための外側であったり、外側のための内側であったりと、役割を入れ替えながら、表面を写し取り、かたちを裏返しながら空間を手に入れて。

知られていない隠り合わせの関係と、組み立てを運命づけられています。手探りで空間のかたと関係を見るための箱です。

「Overflow (コップから水があふれる様について)」は昨年制作しました。

しまい込むべき感情のセンシティブな状態について、心の中のコップがいっぱいになり、水があふれ出すようなシーンが現れていた経験があります。その小さな氾濫を想つくりました。

感覚的に、この作品を今回の個展にぜひ出品しようと思ったものの、この文章を書く(生活化する)段になって、震災津波と原発の汚染水の流出の最中、それ以前の個人的な氾濫についての作品を。

「Overflow」というタイトルのもと出品することに畏れを感じています。私はこの震災直後、周りの友人數名を巻き込み、書き込まれて、そのシーンの現れていた経験時と同じような状態に陥り

テレビから流れる津波の映像は、心理的に直接作用する心の実像となつたように感じています。

健やかでいられますよう、祈りを込めて。



"The route II" 2011
wood, wire

「空間のみちすじ II」 2011
w256×d300×h65mm 木・ビア／線



"The route I" 2011 (insaide)
wood, wire

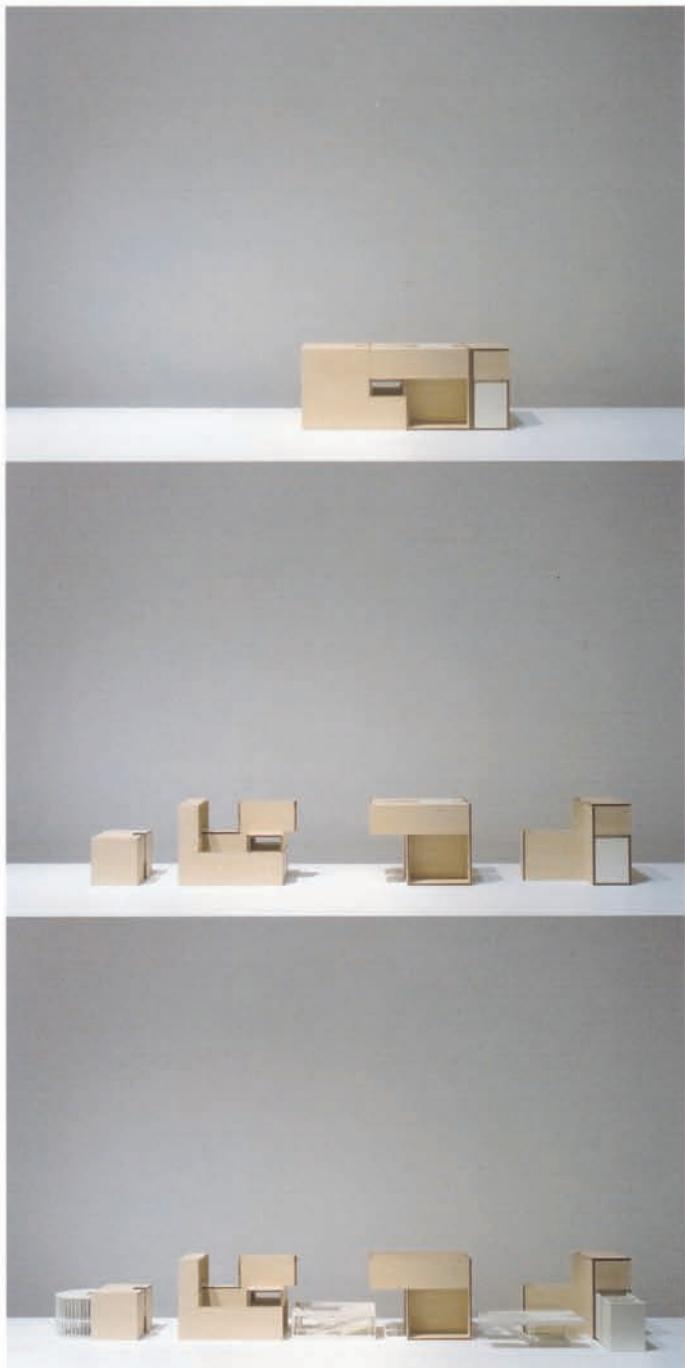
「空間のみちすじ I」 2011 (内部)
w174×d300×h70mm 木・ビア／線

"The route III" 2011
wood, wire

「空間のみちすじ III」 2011
w256×d300×h62mm 木・ビア／線

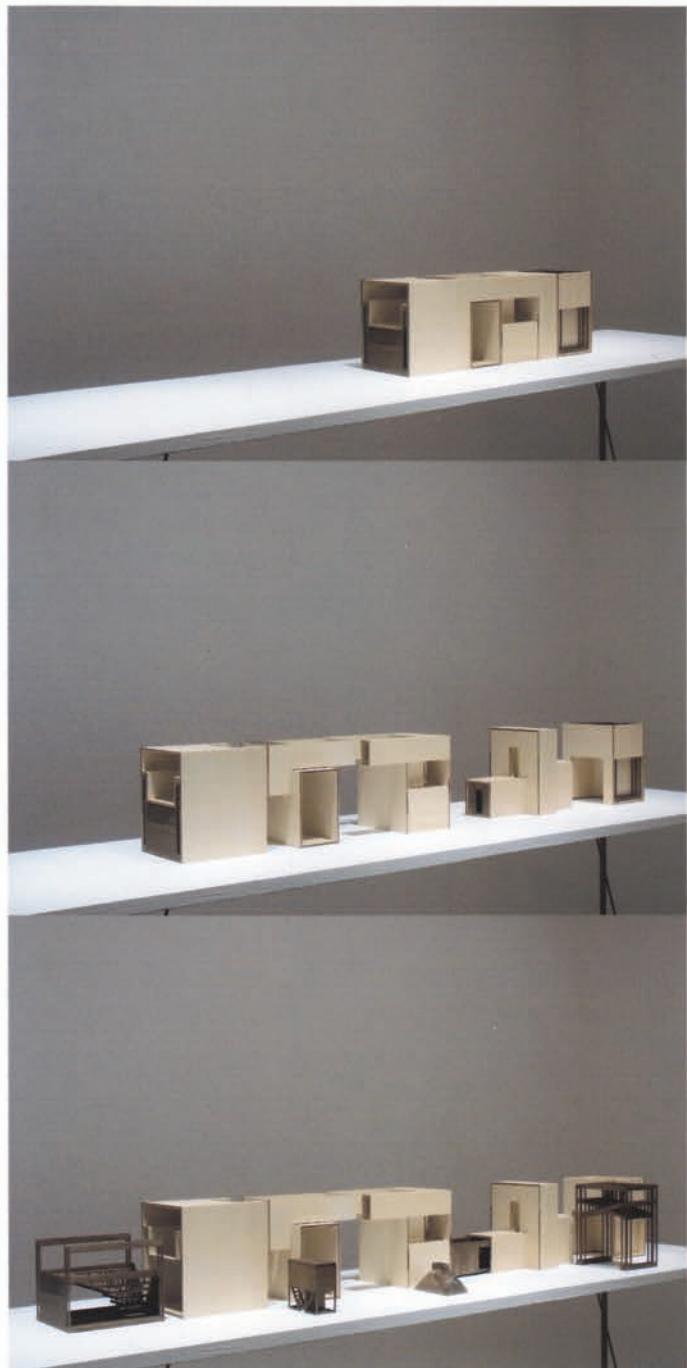
& insaide (内部)

他に出品した「Overflow」のシリーズは
2010年GALLERY ろば屋での個展のページ(前ページ)
を参照。



"Inside structure of the structure I" 2011
wood

「しくみの内側のしくみⅠ」2011
w492×d161×h192.5mm 木



"Inside structure of the structure II" 2011
wood, wire

「しくみの内側のしくみⅡ」2011
w602×d161×h200mm 木・ピアノ線

"Pieces froides"

「冷たい小品集」 2012.5.22～6.3 gallery RO-BA-YA(新潟市)



私の雪への愛は

毎日長岡大橋を渡るときの運転席から見る世界と
北東の勉強部屋の窓から見える家の前の小路の様子と
キッチンの小窓からの隣の庭の眺め
南西の居間からの奥へ直線的に伸びる空き地と路の景色に
あつという間に育まれた。
長岡に越してきて3度目の冬でした。
5月の展示ですが、雪のことを想って制作しました。
サティの曲と出会ってそればかり聴いて雪の日々を過ごしました。
「冷たい小品集」はサティの曲のタイトルです。
その中の「ゆがんだ踊り」に惚れ込んでしまい
今でもその曲を聴くと雪の降り積もる景色の白昼夢を見るようです。
スタイルに
幾重にも変化しながら返され続ける旋律は
雪が降り続く様と重なります。
初めて楽譜を手に入れて、ピアノを練習しました。

バーツを組み立ててかたちが立ち上がっていく様と
木の塊を削っていってかたちが立ち上がってくる様と
楽譜を音に変換できたときに立ち上がってくる空間と

そんな霞のような手応えを頼りに
この展覧会は構成されています。

"piece froides"

「冷たい小品」 2012

ø190×h80mm 木・針金／個人蔵

"Etre visible un moment"

「一瞬見えるように」 2012

w220×d35×h75mm 木・和紙

"blanc"

「白色」 2012 w430×d90×h65mm 木／個人蔵



"glimmering"

「明滅」 2012

46×64×h20mm & 50×68×h20mm

木・画像・デジタルフォトフレーム

(今でも
急に
あんなにたくさんあった雪のないことに
はっと驚く時がある。)

アトリエで小さなパーツを組み立てていた
この2つの小さな構造物は
組み立ての最終段階を迎えていた
段取りを考え、組み立てやすい道筋を通ってここまで来た
この2つは合わさって1つになり
さらに別の部材と組み合わせて
1つの作品になる予定だった

ところがこの2つを合わせて私は何かの違和感をおぼえる
2つのそれぞれの途中の段階は
最終的なかたちになるためのかたちであるにもかかわらず
そのまでそれぞれに何かの美しさを持っている
組み合わせるとそれまでのものとは全く別のものになり
それまでの何かが消えてしまう感じでした

中に入るのか、外に被さるのかの両義的な可能性を残したまま
そんなことは関係ないかのように
よそよそしく並ぶ。

奥から手前へ順に

"rise behind"

「背後に聳える」 2012

w290×d35×h350mm (+丸い小さな構造物ø80×40mm) 木

"the home of a cross"

「十字架の家」 2011 w300×d200×h150mm 木

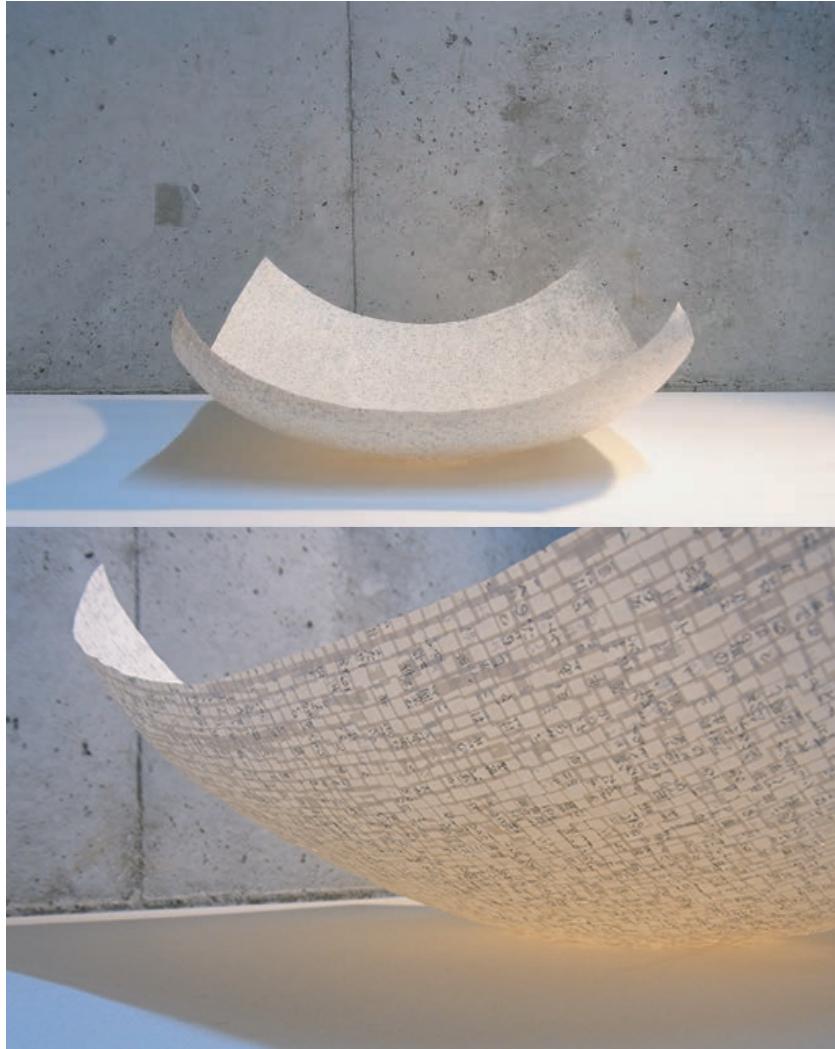
"passer"

「通過する」 2012 w168×d270×h187mm 木



「美術としての本 Artist's Books」

2013/11/2 – 16 Kaede Gallery + full moon (新潟市) 出品



この作品は、ヘッセ『メルヒエン』(新潮文庫／高橋健二訳)に収録されている短編『アヤメ』をテーマに制作されました。物語のはじめのうちに現れる部分、「地上の現象はすべて一つの比喩である。-----」に吸い寄せられて、この物語の内容がずっと頭を離れませんでした。文庫本の『アヤメ』のところ(p155~184)を全部切り取って、行間にナイフを入れ、残りの余白も同じ幅に切って、だいたい真四角になるように切断したものを混ぜ、バラバラなまま一枚一枚を繋ぎ合わせるという作業をはじめました。本も物語も開かれた門もイリスも、既にすべてはここにあったこと、又はここにはないことを確認しようとする衝動から生まれたかたちです。(N.F.に捧ぐ)

(小さい紙片を貼り合わせているうちに、私の予想を裏切って、自然に丸い器のかたちになっていきました。)

「私信 - イリスをさがしています（『アヤメ』について）」

2013 / 40×40×h15cm
文庫本（ヘッセ『メルヒエン』新潮文庫／高橋健二訳）の『アヤメ』のページ・糊



「アンゼルムの門（『アヤメ』より）」

2013 / 本・文庫本（ヘッセ『メルヒエン』新潮文庫／高橋健二訳）

「容量と天体」

2014/7/23 - 8/3 gallery RO-BA-YA (新潟)

空間のことを考えています。心の中の空間と外の空間の関わりを思い、度々箱のかたちの作品をつくりました。箱の中が心の中で、外が外界というような単純な関係ではなく、何か現実と併走している別の場所、空間を用意するということです。

長岡に越してきて数年。それは空間を（建築的に）「測る」から、（液体として）「量る」へと違う視点を運んで来ました。あの降り続く雪の様、空気中の水がずっと変容し続けていて、はかるこの具体的な手掛けりと不可能性をぐるぐると回ってしまう。土地が平たくて、雲が大きく近いことも、空間を器のイメージへと向かわせ、私に「天体」の上に生きていると知らせてくれました。



「ある返礼」(未完) 2014／文庫本の物語のページ・糊



「ある返礼」(未完の残り)



「Land (器と塊)」2014／文庫本の表紙、物語以外のページ・土

「ある返礼」／ a certain return

本展に先駆けて、昨年11月Kaede Gallery + full moonでの「美術としての本」展に出品した「私信_イリスをさがしています」が本を切り貼りする制作のはじまり。ハッセ『メルヒエン』(新潮文庫／高橋健二訳)に収録されている短編『アヤメ』が素材になっていた。

現実を見かけとして並走している世界の広さを感じていたから、『アヤメ』の中の、「地上の現象はすべて一つの比喩である。」ではじまる一節に励まされて、物語の在処の現出（またはその不可能）を確認しようと始めた行為だった。それは本をテーマにした展示の機会だったからなのだけれど、今回再び本を切り刻む決心をする。

本（物語）は印刷されて、この世にたくさん存在し、多くの人に愛され、個人所有であっても公共の財産として扱うべきものである。その上で更にその物語が紛れもなく「私のもの」だと想えるときがある。個人的な思い入れがページに浸透してしまって、それが強くなっている、切り刻むという一線を越えた。

そんな個人的な心情状況と同時に、もう一度この作業をしてみたい動機があった。『アヤメ』は短い物語。簡潔であって、それはきっと四角いかたちに取まることが相応しかった。ある世界への入り口となるとしても、物語としては閉じているように思えた。（度々制作する箱のかたちも、閉じた姿を見せると共に、それとは別な方法で、世界に対してひらいでいる。）有限の領域の場合、全体を想定してしまう。紙片を貼り合わせていく中でつい、分散を志向し自然を模倣する。偶然に身を任せた時にこそ顔をのぞかせるような、ささやかで根本的な欲望を観察し、自覚することとなった。なので私には次に、ひらいたかたちが必要だと思った。『ギフト』は『アヤメ』のページ数10倍程の物語。容易に閉じようがないように思えた。想定できない、コントロールがきかないことも、この制作には必要な要素だから。

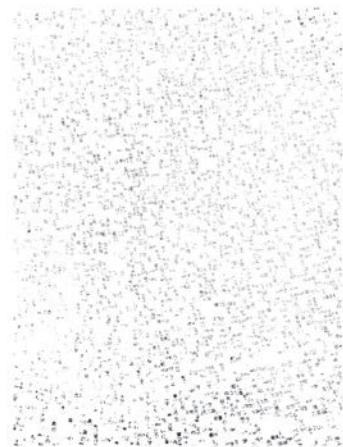
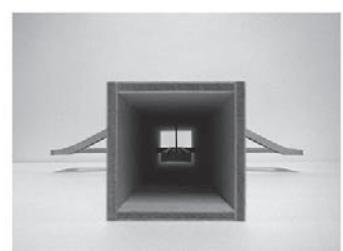
アーシュラ・K・ル＝グウィンの『ギフト』(河出文庫／谷垣晩美訳)は、主人公がその地で受け継ぐ特別な力の中でも、強すぎる「ギフト」に翻弄されながら成長していく物語。その「もどしのギフト」は、時に命を奪い、草木を枯らして荒れ地を出現させた。

作業を進めているうちに自然に丸みを得ていくのを見ていて、「天体」みたいだと思った。展示のタイトルに「天体」という言葉を用いることを決めていて後に、オーギュスト・ブランキの『天体による永遠』(岩波文庫／浜本正文訳)に出会う。

(出会いの順序も、そのはたらきや役割、意味についても、お互いが入れ替わり続け、時を何度も廻上しなおして、決して着地することがない。)



「引力」 2014／木
90×90cm のテーブル天板の中央が緩やかにくぼんでいます。
手で触れて鑑賞して貰いました。
直径 5~50mm のまるいもの。



「遅れて来た光 I 」 2012
「遅れて来た光 II 」 2014
「遅れて来た光 III 」 2014
「遅れて来た光 IV 」 2014
／ラムダプリント
過去に制作した作品を撮影した写真です。
資料写真とは異なる視点で撮影しました。

「充满と空虚」

2015/4/18 - 26 文学と美術のライブラリー・游文舎（柏崎）



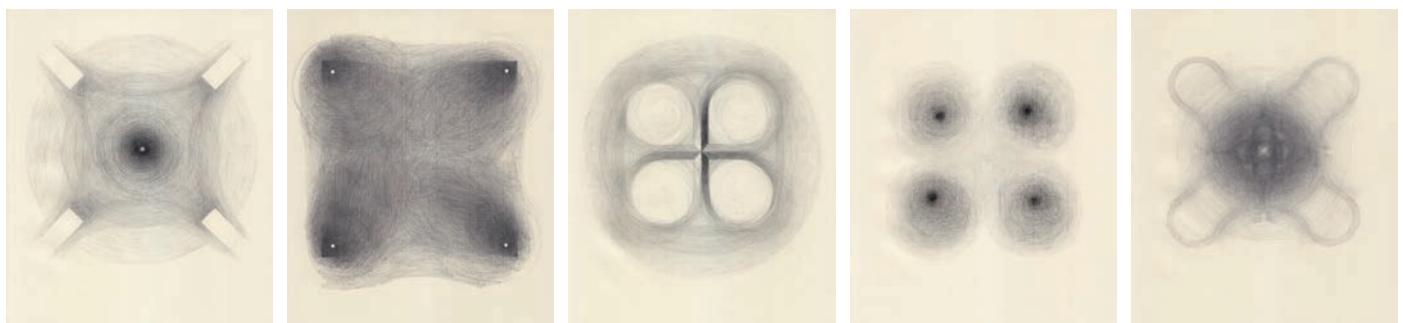
「入る」 2005／400×400×346cm／木

「充满と空虚」は2005年に東京で制作発表された作品です。

今回は再展示ということで、自分のアトリエから、個人の收藏者さんのお宅から、作品委託先の東京のギャラリーから作品を集め、9点全て一堂に会することとなりました。

昔の図面などの制作の記録を見ても、既に他人の顔をしています。作品は私自身や私の一部とは限りません。時間が長く経ったので、他人になったということでもないようです。

もう一度展示をするにあたって、出会い直しの機会にと、図面を振り返りながらメモをとり、内容について考え、絵を描いてみることにしました。



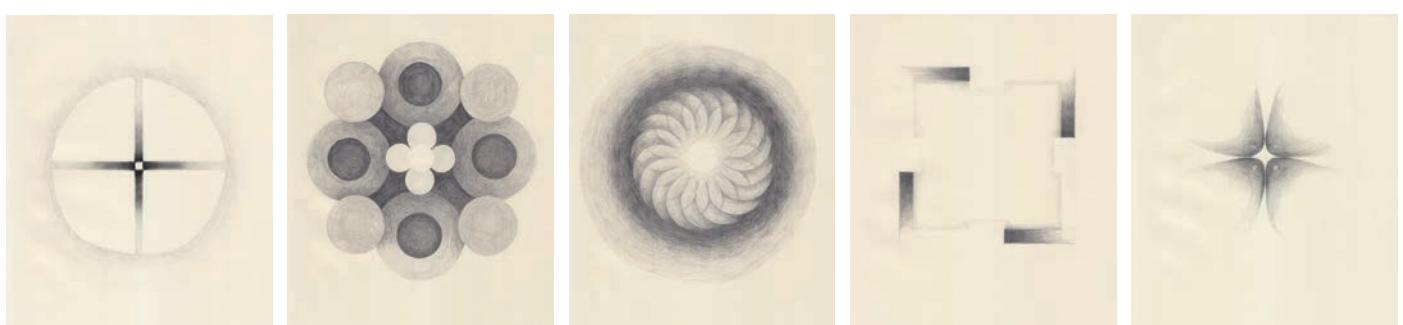
1-1

3-2

4-1

4-2

5-1



5-2

5-3

6-1

7-2

8-1

「untitled」 2015／紙・鉛筆

「ある返礼」は、昨年夏 gallery RO-BA-YA(新潟市)での個展「容量と天体」に出品した作品です。文庫本『ギフト』(アーシュラ・K・ル＝グワイン著・谷垣暁美訳／河出文庫)の物語のページを細かく裁断し、混ぜ合わせ、文字を選ぶような恣意的な意思を排除したまま、再び一枚一枚をほんの少しの糊代を重ねるのみで貼りつなげていく制作です。発表当時も今もまだ未完のままであります。糊と紙の伸縮の関係のせいか、自然にかたちが立ち上がって、器のようになっています。その様子を今回撮影し、写真作品として展示しました。



「遅れてきた光_ある返礼 I」「遅れてきた光_ある返礼 II」
「遅れてきた光_ある返礼 III」「遅れてきた光_ある返礼 IV」

2015／各 ed.5／デジタル ビゲメント プリント／B2

「うつしかえ」

2016/6/15 - 26 GALLERY RO-BA-YA (新潟市)



「あやとり」は手指の動きを紐にうつしかえています。簡単な動きで作られたあやとりが、よく見るととても複雑な造形物だということに驚きました。一周して元のところに帰ってくるはずのあやとり紐の経路について制作しました。

制作の経緯

1. 手指のない状態でのあやとり紐をスケッチで確認
2. 紐の経路を通路に見立てて作る

「かめのこ」のあやとりの行程を図面にする。傾斜の角度についてや、紐が上下に交差するところでは一定以上の高低差を確保するようにルールを決めて、「かめのこ」の構造をうつしとり、その通路の距離（あやとりにとっては紐の長さ）が保たれるように計画し、模型を制作した。

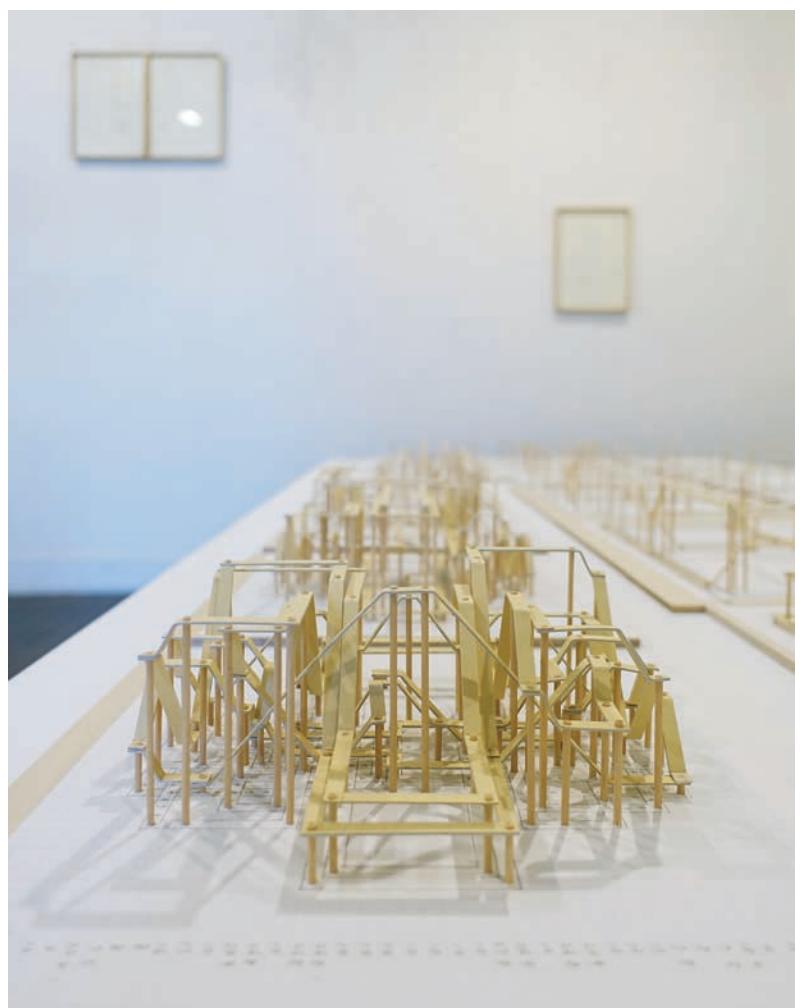
「重なる箱」は、いくつも箱の作品をつくっているうちに、内と外を隔てる板の厚みの部分について考えるようになって制作した作品のひとつです。世界の仕組みや作り立ちは、動力源のような中心的なイメージのものよりも、板の厚みのような副次的に思えるものに依るのかもしれません。隣接するかたちがうつしとられ、うつしかえられていく箱のかたちです。



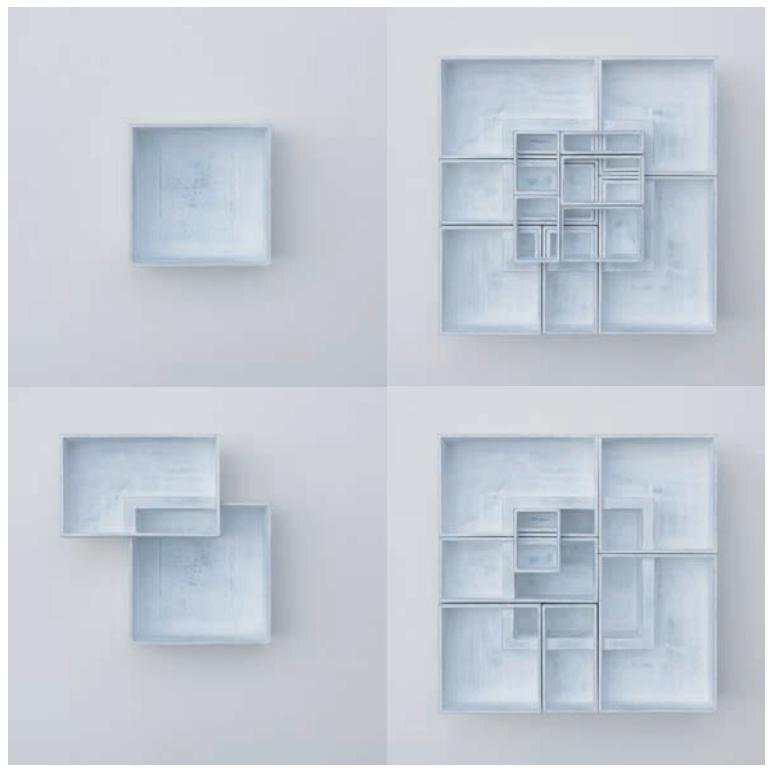
「かめのこ」 2015 / image size : 220×185mm / 鉛筆・画用紙

「Loop_かめのこ 1/11」

2016 / 180×250×h70mm / 木・方眼紙・厚紙



「Loop_かめのこ 2/11」 2016 / 250×250×h70mm / 木・方眼紙・厚紙



「うつしかえ」

2016/8/6 - 21 ガレリアポンテ（金沢市）

ものを異なる表れに換える作業について考えていました。楽譜を見ながらピアノで演奏することも、こうして私の興味をテキストに書き起こすことも、「うつしかえ」と考えることができます。
ものを異なる表れに換えるために、異なる方法を用いることは、違う制約や価値を持つ場所に移転することのように思えます。決して核心に近づいていくことではなく、ズレを新たに生成していくような行為かもしれません。でもその中に、今まで見ていなかった景色をみつけ、驚くことがあります。

あやとり紐の経路をめぐるドローイングや図面、模型様の作品と、これまでの私の制作で中心的なテーマである「箱」の作品の中から、隣接するかたちをうつしかえていく箱をいくつか展示します。





9



8



7



6



5



4



3



2



1

「重なる箱_2」 2016 / 210×230×h120mm / 木 / 個人蔵

この箱が組み合わさる様子の動画を見ることができるサイトのアドレス : <http://vimeo.com/165864359>

「かさなりとかたまり」

2017/11/4 - 18 Kaede Gallery + full moon (新潟市)

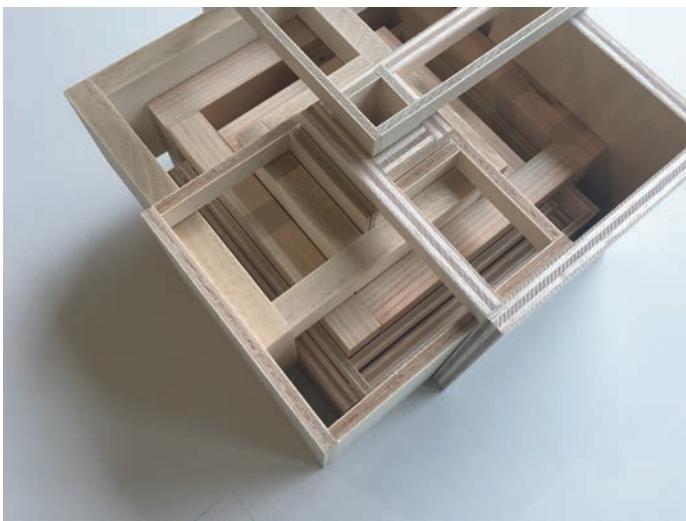
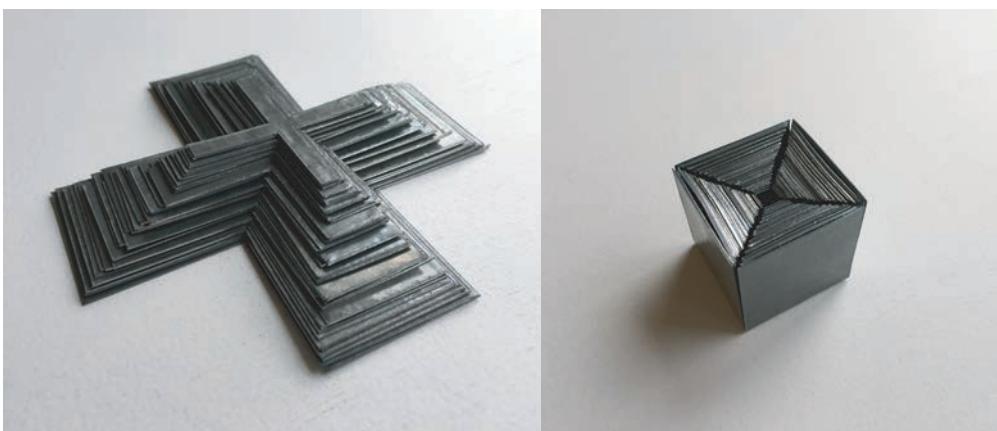
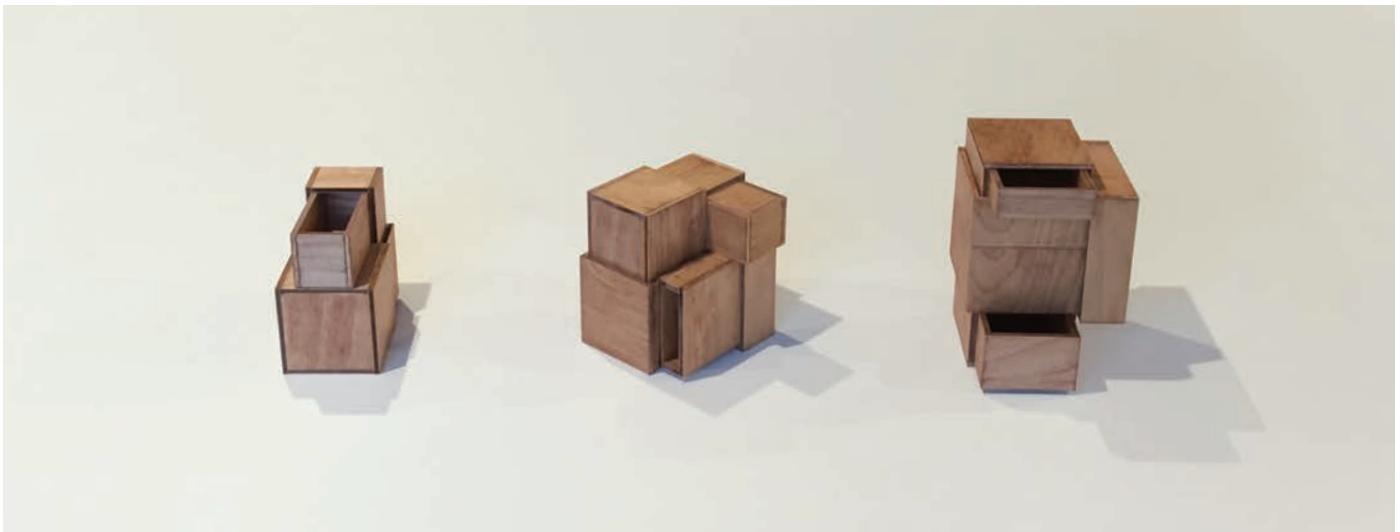
箱を主なテーマに制作をしています。自分や人やこの世界の成り立ちへの興味から、物語や信仰、神話、ユング心理学などを入口に、内側に向かって知ろうとすることが箱のかたちを用いた作品につながっていました。

制作を続ける中で、箱には内も外もあり、その関係は入れ替わり変容すると実感できるようになっていきました。そして今は、神様や運命といった形而上学的なものこそが、箱の「板の厚さ」という具体的な物事に集約されているように感じています。箱を組み立てたり、重ねたり、かぶせたりすることは一見脇役に思える「板の厚さ」に事の主導権を握られています。そこでは計算や計画でわかりきった結果が待っているだけのようにもかかわらず、実際のかたちはイメージしきれない要素を持っていて、シンプルなのに把握しきれない不思議を経験します。

かたちに背景や含蓄を持たず、ただただそれを注意深く、そして自然に見ることについて、理解したり把握することの難しさや可能性について、目を向け続けていたいと思っています。



「重なる箱 _3」 2017 / 307×326×h138mm / 木 (組み合わせた 17 個の箱)



「かぶさる箱 1」 2017 / 66×107×h109mm / 木（組み合わさった4つの箱） 「かぶさる箱 2」 2017 / 98×108×h118mm / 木（組み合わさった6つの箱）

「かぶさる箱 4」 2017 / 106×118×h155mm / 木（組み合わさった7つの箱）

「鉛のかさなり 2」 2017 / 40×40×h40mm / 鉛（入れ子状に重ねられた36枚の鉛）

「重なる箱_5」 2017 / 200×200×h123mm / 木（組み合わさった7つの箱） 「かさなりとかたまり_ひも」 2017 / 170×170×h14mm / 木

「かさなりとかたまり mini」

2017/10/19 - 12/20 忘日舎 book store (東京西荻窪)

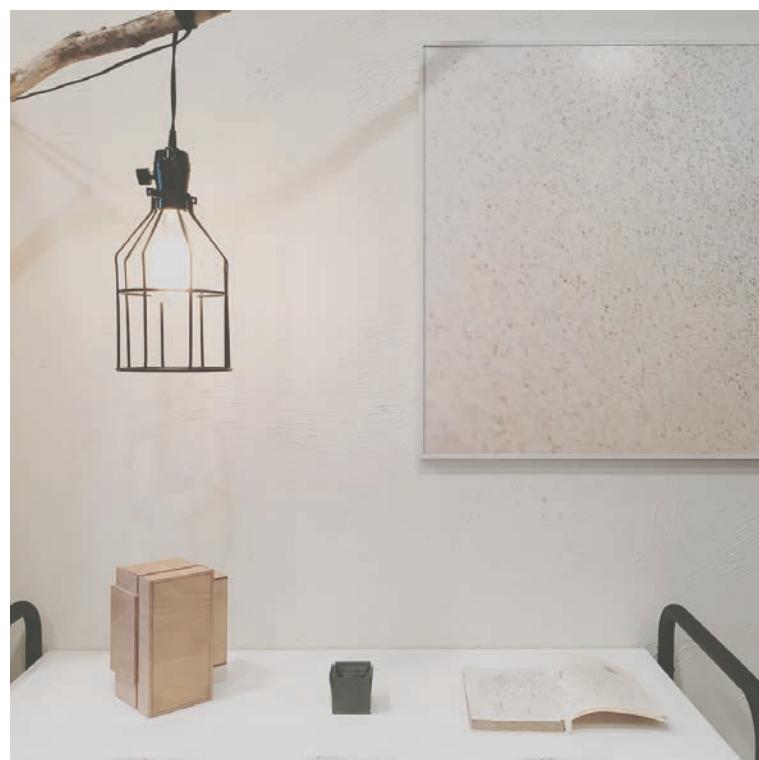
箱を主なテーマに制作をしています。自分や人やこの世界の成り立ちへの興味から、物語や信仰、神話、ユング心理学などを入口に、内側に向かって知ろうとすることが箱のかたちを用いた作品につながっていました。制作を続ける中で、箱には内も外もあり、その関係は入れ替わり変容すると実感できるようになっていきました。そして今は、神様や運命といった形而上学的なものこそが、箱の「板の厚さ」という具体的な物事に集約されているように感じています。箱を組み立てたり、重ねたり、かぶせたりすることは一見脇役に思える「板の厚さ」に事の主導権を握られています。そこでは計算や計画でわかりきった結果が待っているだけのようにもかかわらず、実際のかたちはイメージしきれない要素を持っていて、シンプルなのに把握しきれない不思議を経験します。

かたちに背景や含蓄を持たず、ただただそれを注意深く、そして自然に見ることについて、理解したり把握することの難しさや可能性について、目を向け続けていたいと思っています。

【作品についての補足】

写真作品と文庫本の作品には関係があります。

私はアーシュラ・K・ル＝グウィンの『ギフト』(河出文庫／谷垣暁美訳)の物語のページを細かく切り刻み、ほんの少し糊代をかさねてランダムにつなぎ合させていった立体作品「ある返礼」(未完・2014)をつくりました。今回はその部分を撮影した写真作品と、その制作で残った文庫本の物語のあった部分に「土」を入れた作品を合わせて出品します。



「遅れてきた光_ある返礼 IV」2015／各 ed.5／デジタル ピグメント プリント
「かぶさる箱 3」2017／木（組み合わさった 8 つの箱）

「Land（器と塊）」2014／文庫本の表紙、物語以外のページ・土
「鉛のかさなり」2017／鉛（入れ子状に重ねられた 36 枚の鉛）

「つづくうつしかえ」

2018/10/20 - 30 gallery RO-BA-YA (新潟市)

板から紐を彫る作業は、通常の文脈的なアプローチでことを為すのとは違って、道すじのないところから、異なる層にある方法で回路が開けていく様子に似ている。



「a different method」 ed1/5 / 2018 / 300×300mm / ラムダプリント

「a different method _ かめのこ」 2018 / 200×200×d50mm / 糸・布・パネル・アクリルボックス

「鉛のかさなりのウロボロス _ 太」 2018 / 50×50×h55mm / 鉛（習作）

「鉛のかさなりのウロボロス _ 細」 2018 / 45×45×h15mm / 鉛（習作）

ドローイング / 2018 / 各 156×250mm / 紙・鉛筆

右上と中段・撮影：松尾宇人



「輪の彫刻」 2018／樟（大きさは名刺ケースに入る程度）

「a loop」 2018／190×190×h20mm／樟

「a loop」 2018／190×180×h20mm／樟

「紐の彫刻」 2018／55×340×d18mm／樟

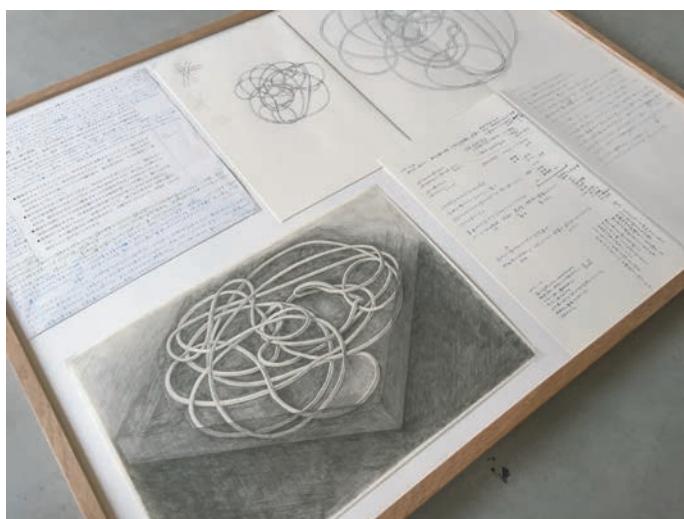
「a loop」 2018／220×140×h20mm／樟

左上と右上、下段・撮影：松尾宇人

「2019 NEW YEAR EXHIBITION」

2019/1/13 – 27 maison de たびのそら屋（新潟県長岡市）出品

岡谷敦魚・菅野泰史・コイズミアヤ・小林花子／小林弘樹（地域紙 Life-mag. 発行人）・平井紫乃：舞踏公演・かめもなか：ライブ



「重なる箱_5」 木 組み合わさった7つの箱／2017

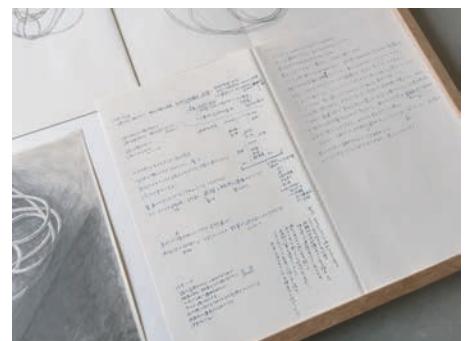
「This box fits inside (or outside) the others.」

ビゲメントプリント（重なる箱_3部分の構成写真）／2019

（制作に関わるスケッチと散文） 紙・ペン・鉛筆／2017—2019

「untitled」 ビゲメントプリント（a loop の構成写真）／2019

「a loop」 樟／2018



「DSCH の秘められた通信」

2019/5/7 - 31 ウィリアム モリス 珈琲&ギャラリー（東京渋谷）出品

古典四重奏団ショスタコーヴィチ弦楽四重奏曲全集のパッケージデザインに寄せた、コイズミアヤのアートワークと桂川潤さんのドローイングの展示



↑ 「portrait_1」

2019 / 420×420×d50mm / 木・アクリル板・塩化ビニール版／個人蔵

↓ 「portrait_2」

2019 / 255×420×d45mm / 木・アクリル板



「Artists' Books 美術としての本 II」

2019/9/21 - 10/5 Kaede Gallery + full moon (新潟市) 出品

出品作家：岩橋竜治・コイズミアヤ・さとうゆか・中村文治・蓮池もも

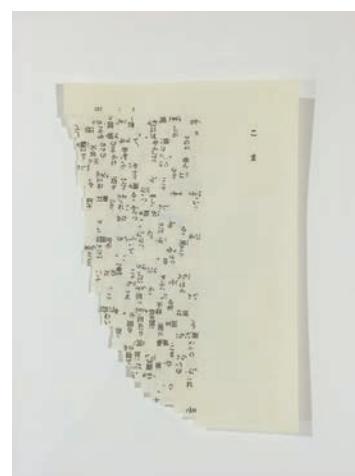
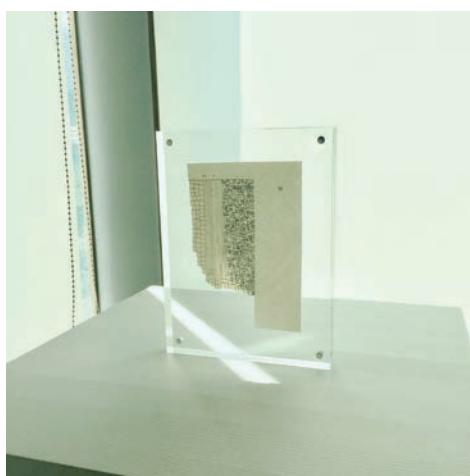
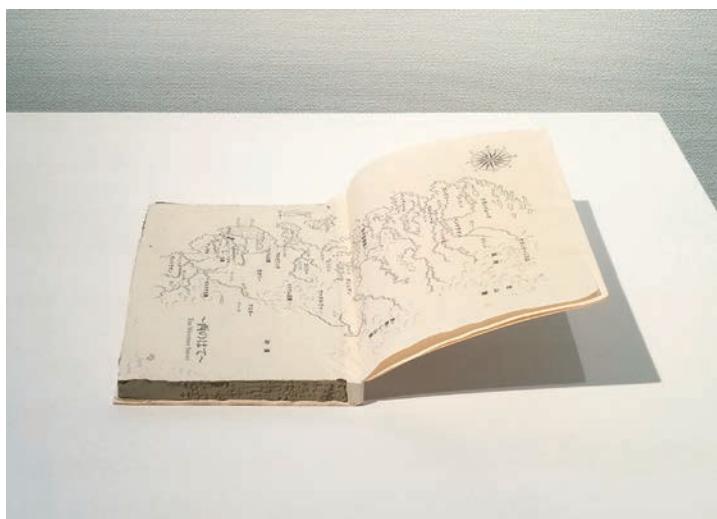


Kaede Gallery + full moon の企画「美術としての本」展を機会に始めたシリーズ。この物語のページを切り取って行間にナイフを入れ、残りの余白も同じ幅に切って、だいたい 1~2 文字程度の真四角になるように切断したものをバラバラに混ぜ、支持体なしに一枚一枚を繋ぎ合わせるという作業をはじめた。生物の体を切り刻んでも命の在処は見つからない、本を手にして読んではいるけれど、物語の在処は本とは別の地平にある。そんな考えから逆説的に物語の在処とその具体的な量をめぐって始めた制作だった。このページには表と裏があるので、両面が活かせるタペストリー、あるいはガラスに挟んだ衝立のようなものに仕上げるつもりだった。ところが、小さい紙片を糊で貼りつなげる時の乾燥により起きる縮みのせいか、私の予想を裏切って紙は湾曲していき、自然に丸い器のかたちになった。

「ある返礼」は、アーシュラ・K・ル＝グワインの『ギフト』を素材にしている。

文庫本の物語以外の部分、表紙と目次、物語の舞台となる土地の地図、解説が残ったので、その物語の不在の部分に土を入れもどした作品が「Land (器と塊)」だ。『ギフト』は、主人公が受け継いだ強すぎる「ギフト (= 特別な力)」に翻弄されながら成長していく物語で、彼の「もどしのギフト」は、時に命を奪い、草木を枯らして荒れ地を出現させる。

「Land (器と塊)」の土の分量 = 物語の分量が、「ある返礼」と同じ量となる。



中左 「Land (器と塊)」

2014／文庫本（アーシュラ・K・ル＝グワイン『ギフト』河出文庫／谷垣暁美訳）の表紙と物語以外のページ、土

中右 「ある返礼」

2014-2019／約 100×100×h70cm／文庫本（アーシュラ・K・ル＝グワイン『ギフト』河出文庫）の物語のページ、糊

下左 「橋」

2019／文庫本（『カフカ短編集』岩波文庫／池内紀編訳より「橋」）のページ、糊、アクリルフレーム

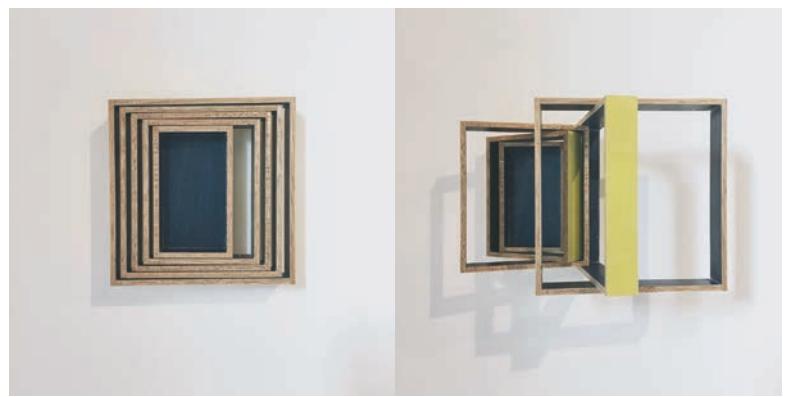
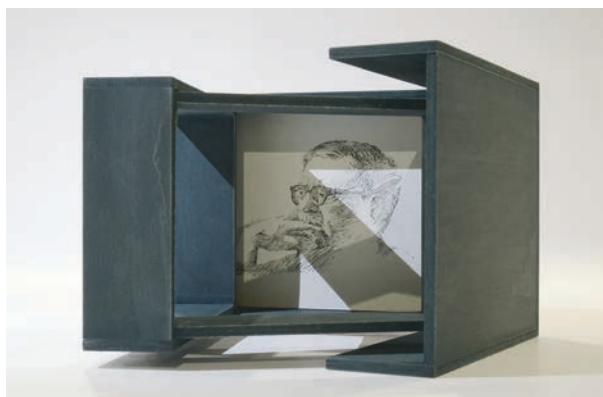
下右 「こま」

2019／文庫本（『カフカ短編集』岩波文庫／池内紀 編訳より「こま」）のページ、糊

「DSCH の秘められた通信 2」

2019/11/23 – 12/19 忘日舎

5月のウイリアム モリスについて、古典四重奏団ショスタコーヴィチ弦楽四重奏曲全集のパッケージデザインに寄せた桂川潤さんとの展示



上段展示風景

右中段から

「DSCH's self-portrait box」

「DSCH's self-portrait box」共に 2018／木・紙

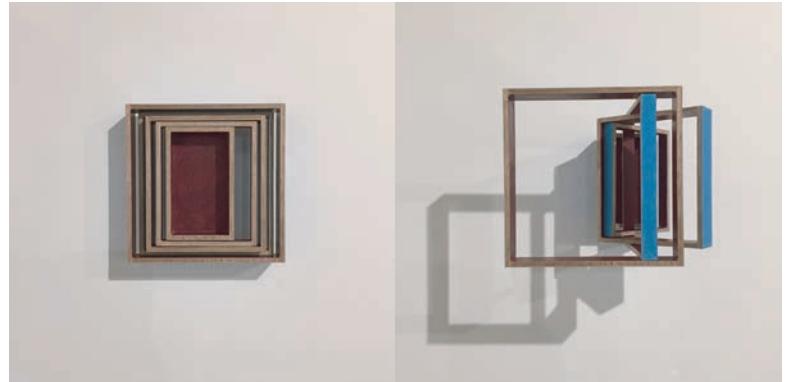
左中段から

「藍色と黄色いシャルトリューズ」

「暗いオリーブ色と翡翠とスミレの色」

「葡萄茶と露草色（えびちゃとつゆくさいいろ）」

共に 2019／シナ合板・ラミン棒・色鉛筆

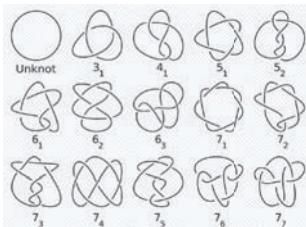


「結び目のはなし」

2020/9/4 - 14 医学町画廊 1F / 楓画廊企画（新潟市）

結び目理論 knot theory とは、紐の結び目を数学的に表現し研究する学問で、低次元位相幾何学の1種である。（Wikipediaから）

まずは「交点数（結び目理論）」 Wikipedia に掲載されていたパブリックドメインになっている右の図を元に制作をはじめた。31、75、とあるのは、3つの交点のある結び目の1つ目、7つの交点のある結び目の5つ目という意味。3, 4は1種類しかないとのこと。11交点から凄くたくさんの種類をもつようになる。(11a が 367 番まで、11n は 185、12a は 1288。a は上下交互の結び目で、n は非交互) 違う記法もある。



あやとり紐は、シンプルな輪なので、結び目ないかたち（Unknot）。結び目をもった紐の状態について、数学的に取り扱う方法が結び目理論。そのしくみに興味をもち、分類表を元にかたちを借りて制作をしました。

紐は線状の形をしているので、道を追うようにかたちづくられる。一方で、木から彫り出す作業は塊とのやりとりになる。はじめに紙の上で分類のために描かれた図をもとに、その構造に気をつけてかたちを描く。二次元に描かれたものを厚みのある木にうつして、高さを与えるように三次元の物体にしていく（垂直方向に積み上げていく）。時に、その構造にあわせて実際の紐で結び目をつくって、それを見てスケッチする。ここで生じてくるかたちは、構造から紙の上のみで描いたかたちは違う出でになり、美しさの要素も異なる。また、はじめから三次元に存在するかたちは写し取るのは二次元から立ち上げていくのとは違う状況となる。さらに別の面では、理論の成り立ち、例えば記法も幾種類もあり、構造（かたち）の捉え方も違ってくる。それらいくつかの層を行き来するようなイメージの中での制作となった。

今回の展示の片隅に、プランクーシについてのはなしを少しだけ書いたものを添えています。プランクーシは「見ること」と「在ること」と「かたちつくること」について、自作アトリエを写真に撮ることによって、何かしらの決着をつけたように私には感じられます。私は彼のその仕事にシンパシーを感じています。

ここからは、作品には直接は関係ないはなしになるかもしれません。結び目理論についてもうちょっとだけ知りたい方のために。

結び目を数学的に扱うにはどうしたらよいのか？

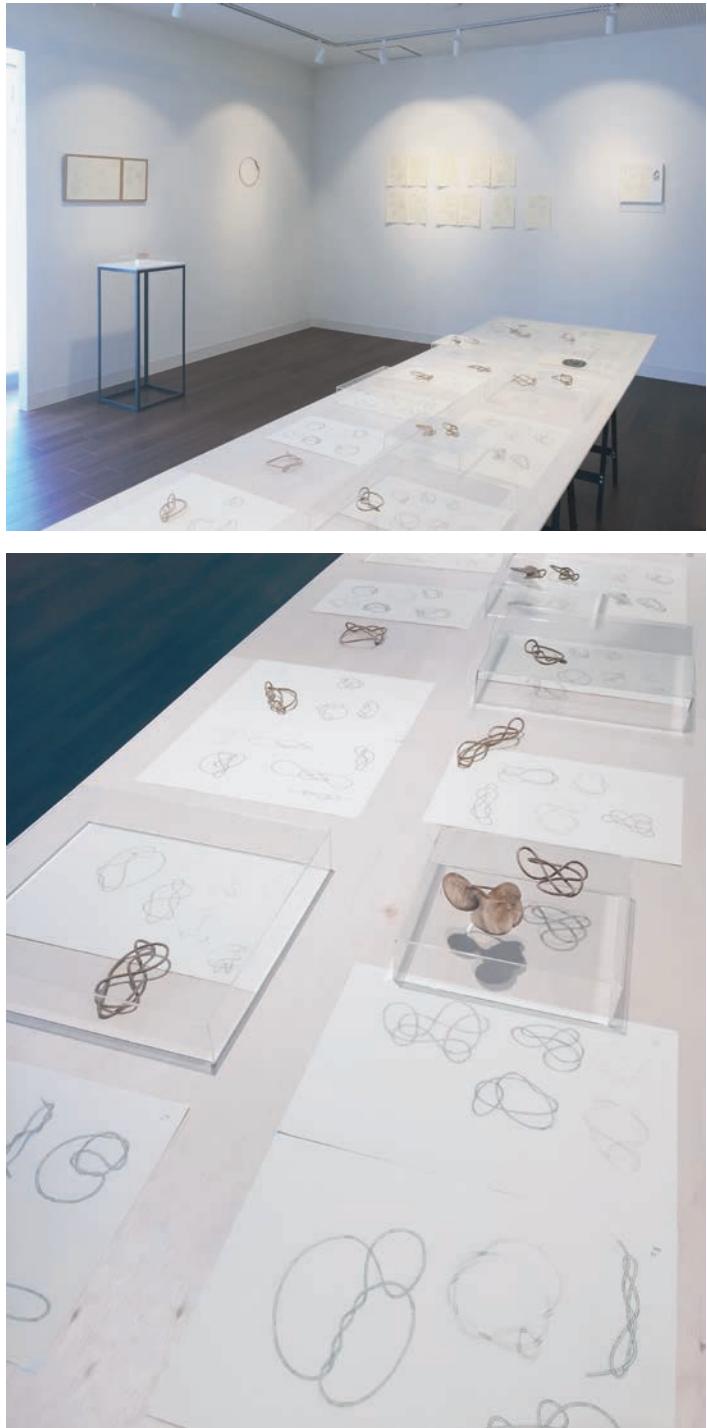
紐が交点をもっているときに、その交点がほどけるものか、ほどくことができないものを区別するところから考える。そのために、私がまず読んだ村上斉さんの「結び目のはなし」（遊星社1990）では、（無限のはずの整数を有限個に分類できる）=（整数全体を割り算の余りによって P 個に分類できる）= 合同式（mod）を使ってみる。射影図の交点のところで弧が分断された状態と考え、それぞれの弧に適切な重み 0, P-1 (P = 自然数) をつける。交換条件 $2x \equiv y+z \pmod{P}$ を用い、ほどける交点 = ライデマイスター移動 LII, III によって不变の場合は、P を法（mod）とした階数は全ての P に対して P 個となることを証明。P を法とした階数が P 個でない結び目があれば、それはほどけないといえる、を導き出す。この本が高校生くらいを対象に書かれたもので、本当の入門的には高校でも学習する合同式（私は習っていない、泣）をつかって不变量について示してある。現在、もっと専門的なジョンズ不変量などの方法の発見で、様々な分野への発展があるようだ。

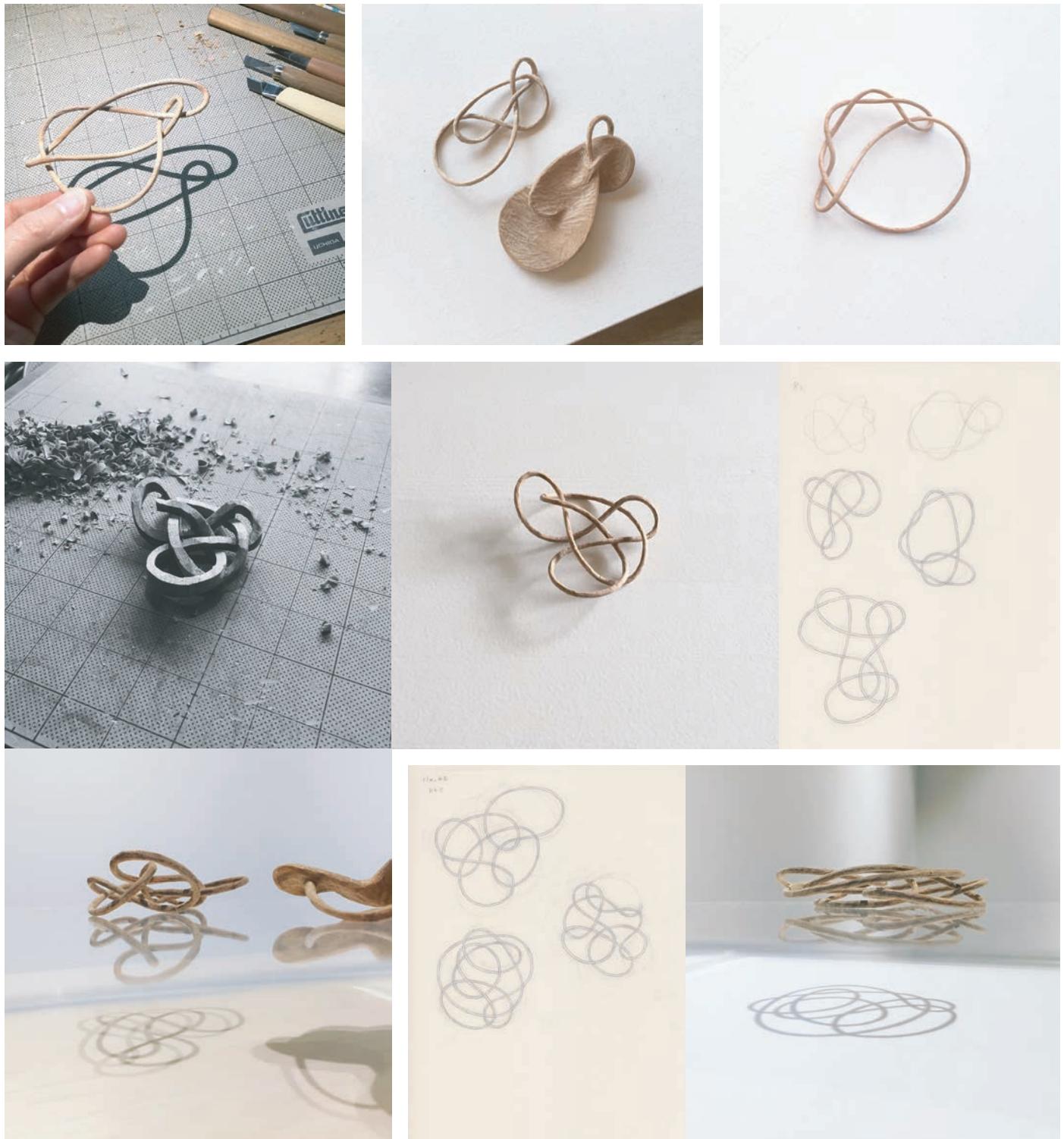
数学の世界で何が行われているのか、数学的に物事を扱う序の口のところをほんの少しだけ覗き見たかった。事の成り立ちやしくみを考え、物事や状況にコミットメントする突破口や方法を探し、地道に試し、働きかけていく世界に見えた。

多様体（高次元含む）についての本を薦めてくださった数学の研究をされている方々に、「数学の世界には、現実世界ではない数の領野があり、現実世界の数ではないのに、多分、そこでの計算や取り組みが実世界に何かフィードバックしていくのだろうなって感じを得てるので、合ってるでしょうか？」って質問したら、「現実世界にない数、という話をするには、まず現実世界にある数というお話をしないといけないと思います。ところで、現実世界にある数とはなんでしょうか？数字というのは我々は日常的に使ってますけど、別にその数字 자체が物体として目に見えるというわけではないですよね。そういう意味では数字は物理学でいうような実体はもってないといえると思います。」って返答をいただいた、本当にほつとした。それは私にとって親しい分野においては、見てるつもりになっているものや、そこにあると思い込んでいるけれど本当にあるのだろうか？あるとはどういうことだろうか？といった問い、又はその応答に関わるものかもしれない。そして抽象について。

私は個人的に数学の分野に興味や憧れがあるのだと思う。ただ、いわゆる数学的なアートの分野に進もうということではなくて、この世界のしくみについて、私なりに少しでも知りたい、そして手を動かして試してみたいということです。

†田中恵理子さん 鹿児島大学数理情報 PG ／ 田中さんとは私の展覧会で作品を見てくださったところから知り合い、時々メッセージのやりとりをするように。ちなみに上記のはなしには続きがあって、馴染みのある数と馴染みのない数の話になり、「8 元数」という言葉が出てきたのですが、ググってみてください。同じ世界のはなしとは思えないぐらいちんぶんかんぶんです。また、数学者は皆、数学というものが概念を超えて実体を持っているように感じていると思うとも仰っていました。今回は結び目の記法の件でとてもお世話になりました。ありがとうございました。





上段左から「輪の彫刻_結び目(6_1)イ」2020／樟 「輪の彫刻_結び目(6_3)」2020／樟 「輪の彫刻_結び目(7_2)」2020／樟
中段「輪の彫刻_結び目(8_2)」2020／樟

(左から制作途中のようす、完成、ドローイング、左下は横からの撮影)

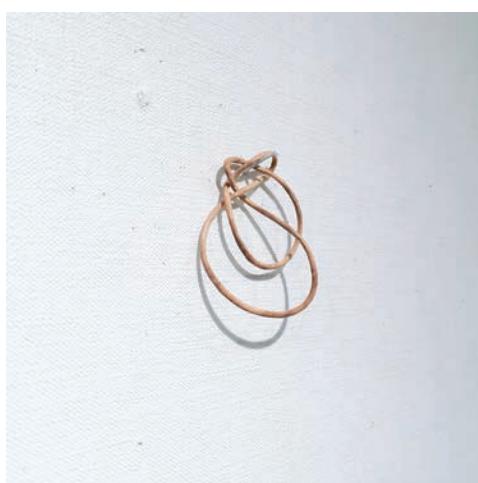
「輪の彫刻_結び目(11n_42)」2020／樟 (左からドローイング、横からの撮影)

「組み立て／空間と量について」

2020/9/26 - 10/11 ガレリアポンテ（金沢）



箱の内と外の交換を繰り返す「重なる箱」、切り刻まれた本を再構築する「物語の量と在処」、紐や結び目のある輪を板から削り出す「紐の木彫」の3つのシリーズを展示します。
空間や量が同じ地平で変容していくことについての制作を見て頂けたらと思います。

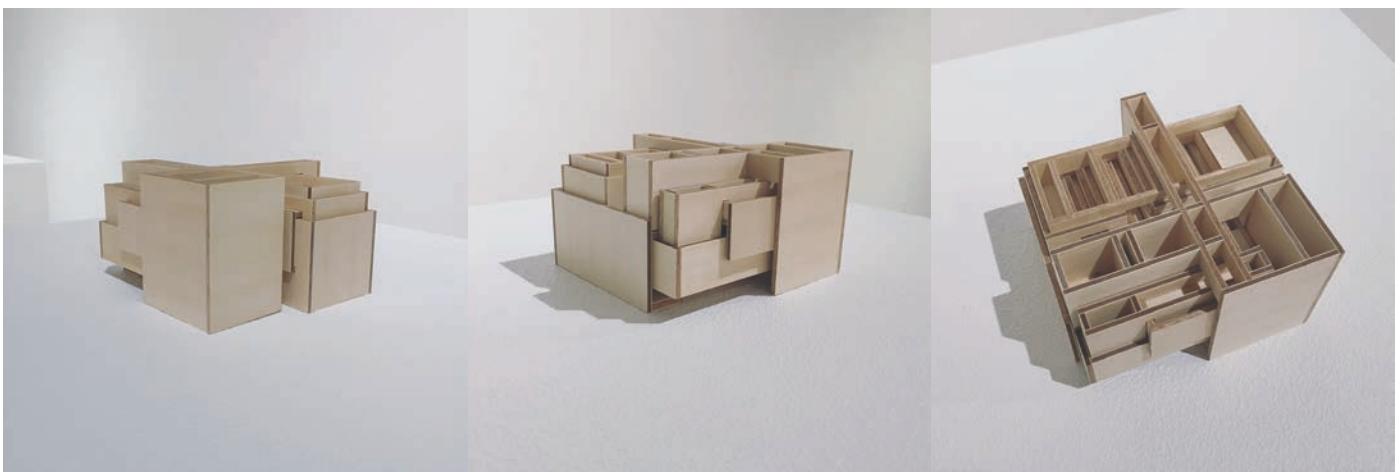


「a loop」 2020 / 170×190×h19mm / 檜
「輪の彫刻 _ 結び目 (6_2)」 2020 / 檜
「紐の彫刻」 2020 / 80×235×d18mm / 檜
「紐の彫刻」 2020 / 60×400×d18mm / 檜

右頁

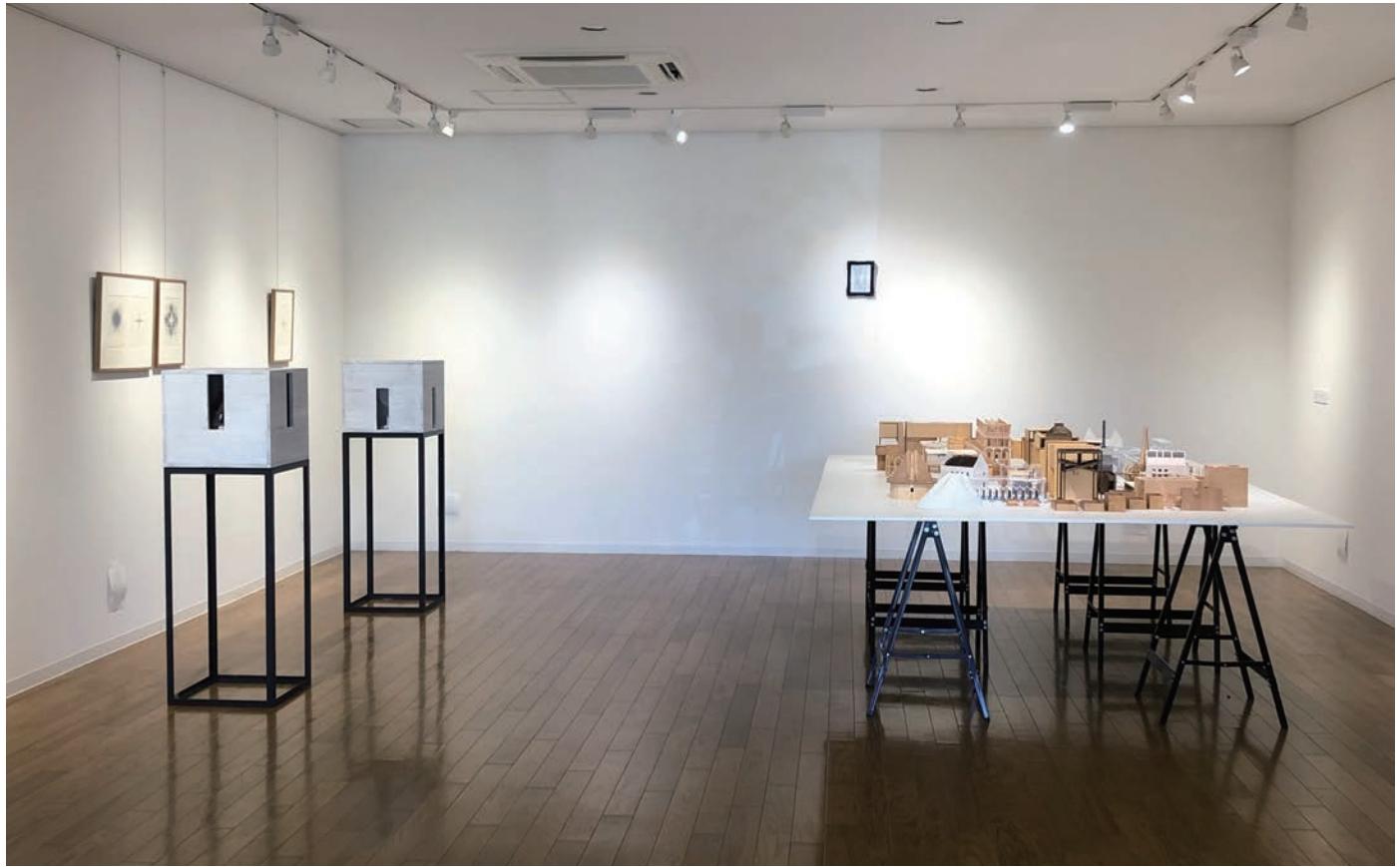
「ある返礼」（の部分の様子）2014-2019 / 文庫本（『ギフト』ル=グウィン）の物語のページ・糊
「重なる箱_6」（組み合わせた12個の箱）2019 / 176×169×94mm / シナ合板
<https://vimeo.com/460022953>

「重なる箱_7」（組み合わせた11個の箱）2019 / 210×202×95mm / シナ合板
<https://vimeo.com/460026216>



「やわらかな座標」

2021/7/17 - 8/9 ギャラリーみつけ（新潟県見附市）

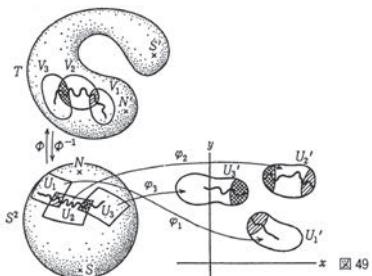


「座標」とは「点の位置を示す数ないしは数の組。」と辞書^{*1}にあります。

少し難しいですが数学の本^{*2}を読んでいて、ある曲面において「座標変換の式」があれば「区分的な座標」を色々な仕方で導入できる自由があること、違う仕方の座標を採用しても本来は同じことだと担保できること、さらには、座標のとり方に自由度が増していくと、元の曲面の決まった形というものがそれほど重要な意味を持たなくなってくるということについて書かれています。数値で完全に固定されてしまうような1つの定量的な世界ではないことが展開されていて驚きます。

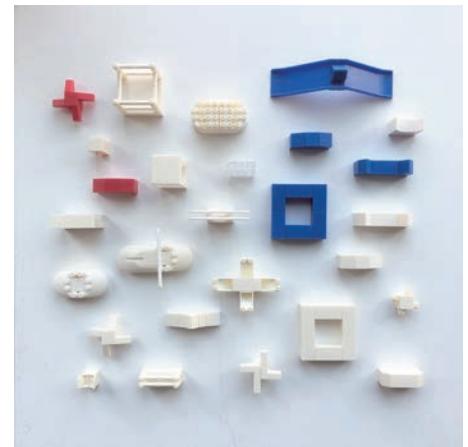
「座標」について比喩的に「何らかの基準に対する物事の位置づけ。」とも辞書に書いてあります。今回、その「基準」を「やわらかな」ものにすると考えてみました。

事物の配置や関係を見たり、似たものを考えたり、イメージを重ねてみたりすることについて展示してみようと思います。



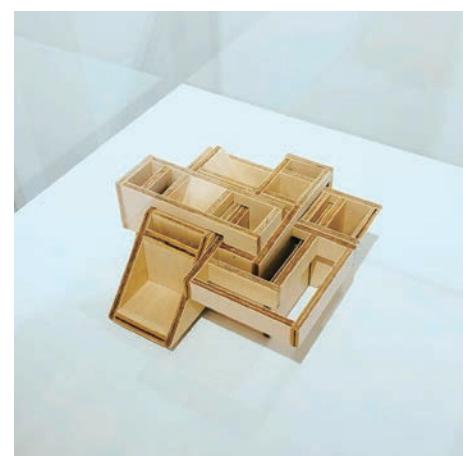
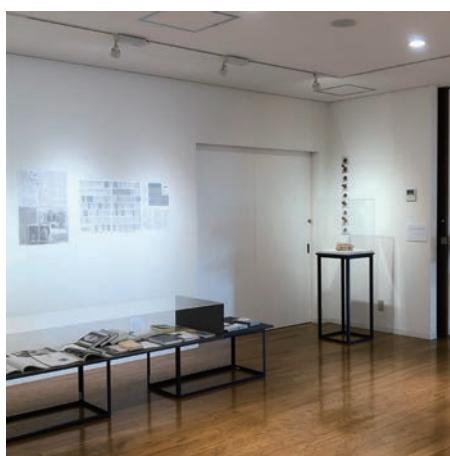
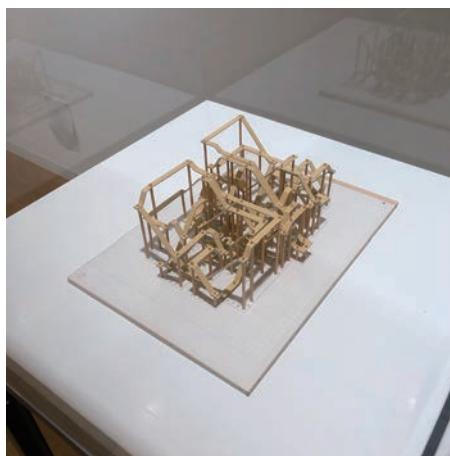
*1『精選版 日本国語大辞典』(小学館)

*2『現代数学への招待』志賀浩二 著(ちくま学芸文庫)図はp.78



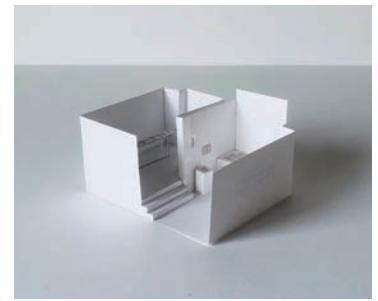
【展示の構成】

- 第1室 1. 《充满と空虚》とその空間を観察して描いたドローイング
2. (『角川類語国語辞典』の序)及び事物の羅列
3. 《monad series》
- 第2室 4. うつしかえ
5. 重ね書き
6. ヒルマ・アフ・クリントが見ていたもの
7. フリーペーパー『点点(ぼちぼち)』を発行しています。
8. 《重なる箱_9》



うつしかえと結び目のはなし

2022/5/7-21 GALLERY TSUBAKI GT2 (東京)



うつしかえ (2015-2016)

ものを異なる表れに換える作業について考えていた。楽譜を見ながらピアノで演奏することも、こうして私の興味をテキストに書き起こすことも、「うつしかえ」と考えることができる。

ものを異なる表れに換えるために、異なる方法を用いることは、違う制約や価値を持つ場所に移転することのように思える。決して核心に近づいていくことではなく、ズレを新たに生成していくような行為かもしれない。そしてその中に、今まで見ていなかった景色をみつけ、驚くことがある。

「5本の指と手首×2つの手」のやりとりの中で行き来する紐がつくるかたちは独自な構造体で、出来上がったかたちを手から外して机上に置き、もう1本の輪の状態のあやとり紐で同じ構造を目視によって実現しようとしてもできなかった。指の動きから引き離すことのできないかたちなのだなと思った。そのかたちの構造を見ようすると、自分が1本の通路を辿っていることに気がついた。紐を1本の通路として捉えることは、指の動きから離れることだった。あやとり紐の経路について制作した。

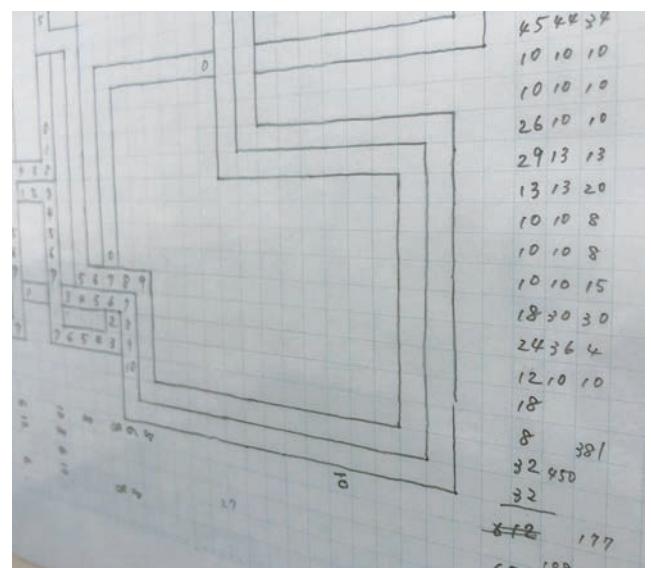
制作の工程

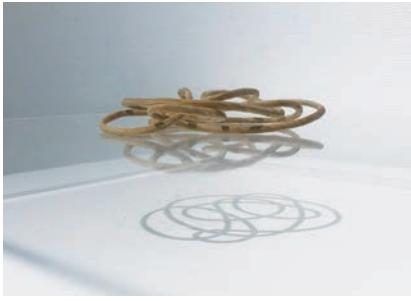
1. 手指のない状態でのあやとり紐をスケッチで確認

2. 紐の経路を通路に見立てて作る

「かめのこ」のあやとりの行程を図面にする。傾斜の角度についてや、紐が上下に交差するところでは一定以上の高低差を確保するようにルールを決めて、「かめのこ」の構造をうつしとり、その通路の距離（あやとりにとって紐の長さ）が保たれるように計画し、模型を制作した。

紐（通路）の長さにこだわったのは、紐はかたちを変えるけれども、一つの世界、システムとして自律している必要があると考えたため。



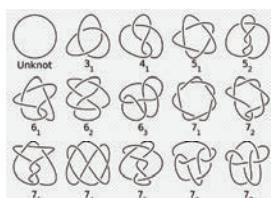


結び目のはなし (紐の木彫は 2017-、結び目は 2020-)

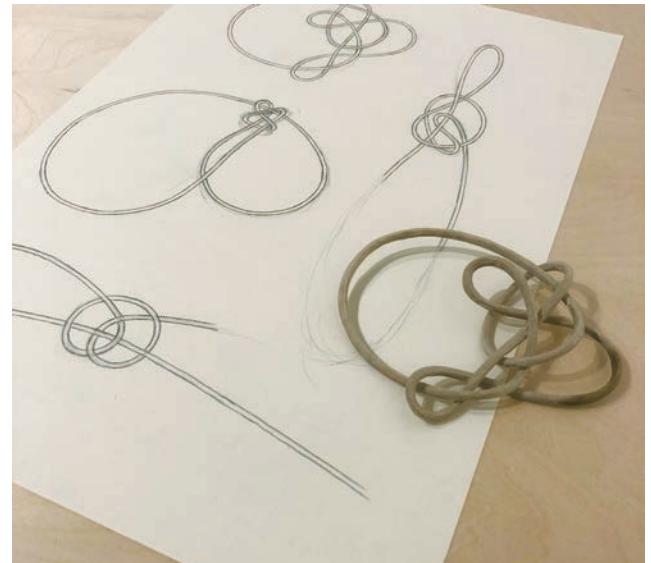
板から紐を彫ることは急に思いついた。あやとりとの関わりもあったけれど、「重なる箱」をはじめとする箱のシリーズだけの新潟個展の時に、「この場には紐が必要だ」と急に思い立ち、追加で1点用意したのがはじめだった。塊と空間という通奏低音的な私の制作のテーマの中で、箱が内外を分けるかたちだという意味合いよりも、箱をかたちづくっている板厚に重きが生まれ、箱の開閉よりも箱の重なりが重要になって、詩的な時間よりもっと具体的な時間を内包するようになっていった。紐についての制作はその変化と連関するように現れた。促されて歩きはじめてしまうような方向と運動やそれに伴う時間をもつ通路としての性質を持つ線的な紐は、太さという実体のある塊でもあり、彫ることによって、線のはたらきとは違うアプローチで出現できることが私には面白かった。その後、トポロジーの結び目理論のことを知り、構造を借りてかたちをつくっている。

「結び目理論 knot theory とは、紐の結び目を数学的に表現し研究する学問で、低次元位相幾何学(トポロジー)の1種である。」(Wikipediaから)

右は Wikipedia の「交点数(結び目理論)」に掲載されている図で、31、75、とあるのは、3つの交点のある結び目の1つ目、7つの交点のある結び目の5つ目という意味。3、4は1種類しかない。11交点から凄くたくさんの種類をもつようになる。



あやとり紐は複雑な構造体をかたち作ったとしても、ほどくとシンプルな輪になることから、結び目ないかたち(Unknot)とされる。結び目理論ではほどけない構造をもった結び目の状態について、まずは二次元写像にして交点の重なりや線の向きからいくつかの不変量を見出し、数学的に取り扱われているという。



かさなりとかたまり

2022/9/23 – 10/3 医学町画廊 / 楓画廊企画（新潟市）



《重なる箱》は2016年からはじめたシリーズです。

箱に世界の様相を入れ込む制作をつづけて来て、箱の板の厚みこそが世界をつくっているものだと考えるようになり、異形の入れ子の箱を制作しています。

おりがみは子どもの頃から好きで、自分の子と一緒に遊ぶのをきっかけに、その後も時々折っていました。何かしら自分の制作と関わりのあるものだと思っていました。

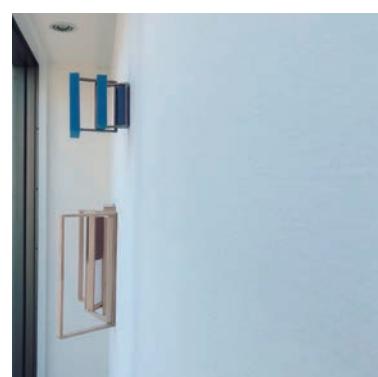
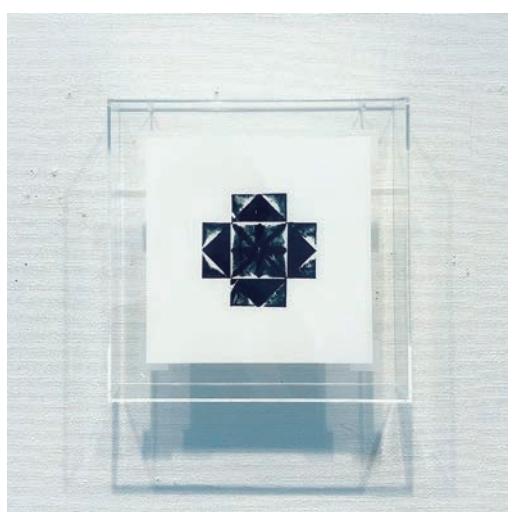
長岡に工房このすぐができる版画のプレス機が身近になり、丁度その時折ってあった紫陽花*にインクを乗せて刷ってみたら、《重なる箱》と似ているところがあることに気がついて、今回一緒に展示してみます。

ルールや記譜、時空間を内包する塊です。

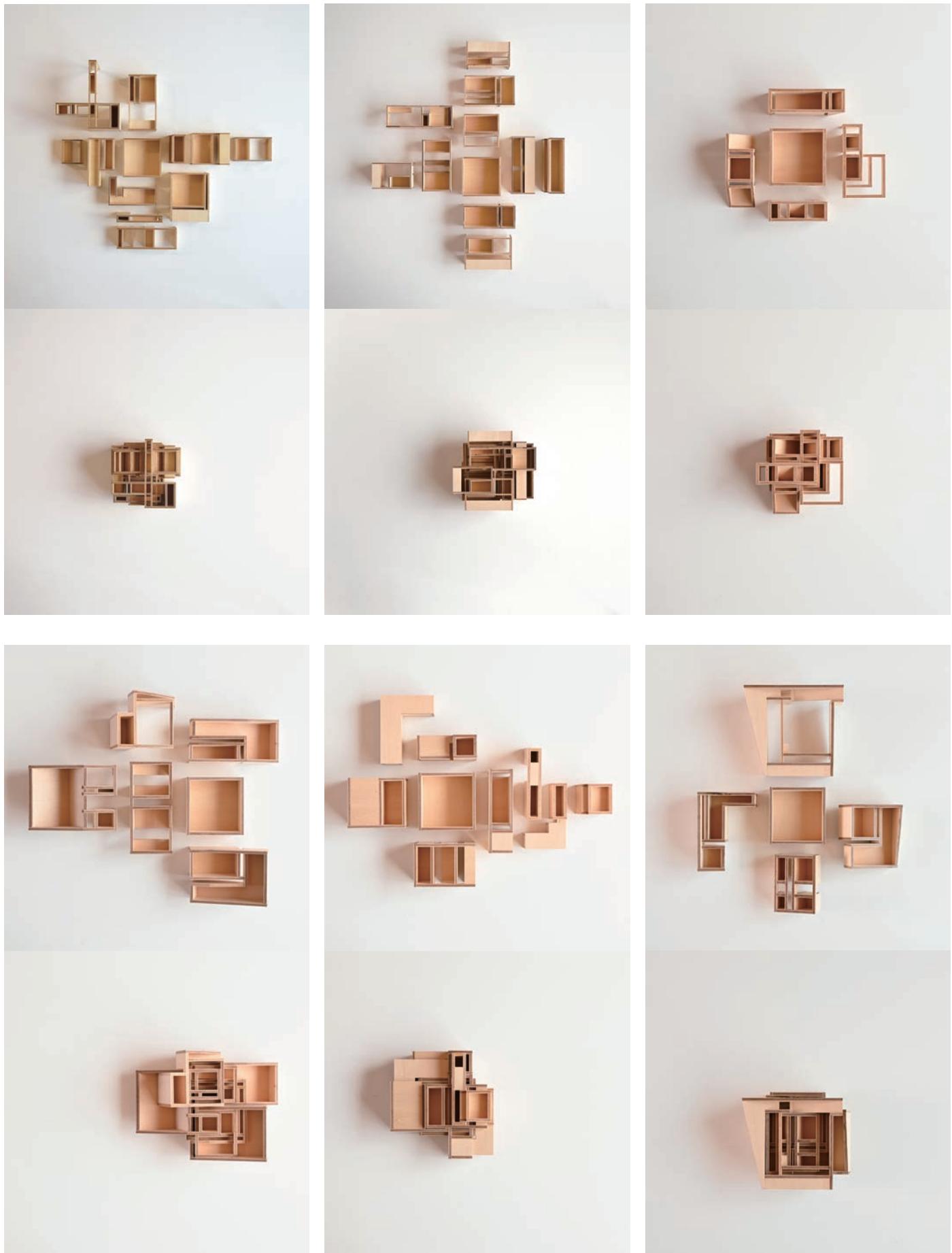
* 紫陽花は『あじさい折りおりがみ』プロジェクト F・誠文堂新光社2017を参照して折りました。



「おりがみ（紫陽花）」おりがみと版画（モノタイプ）



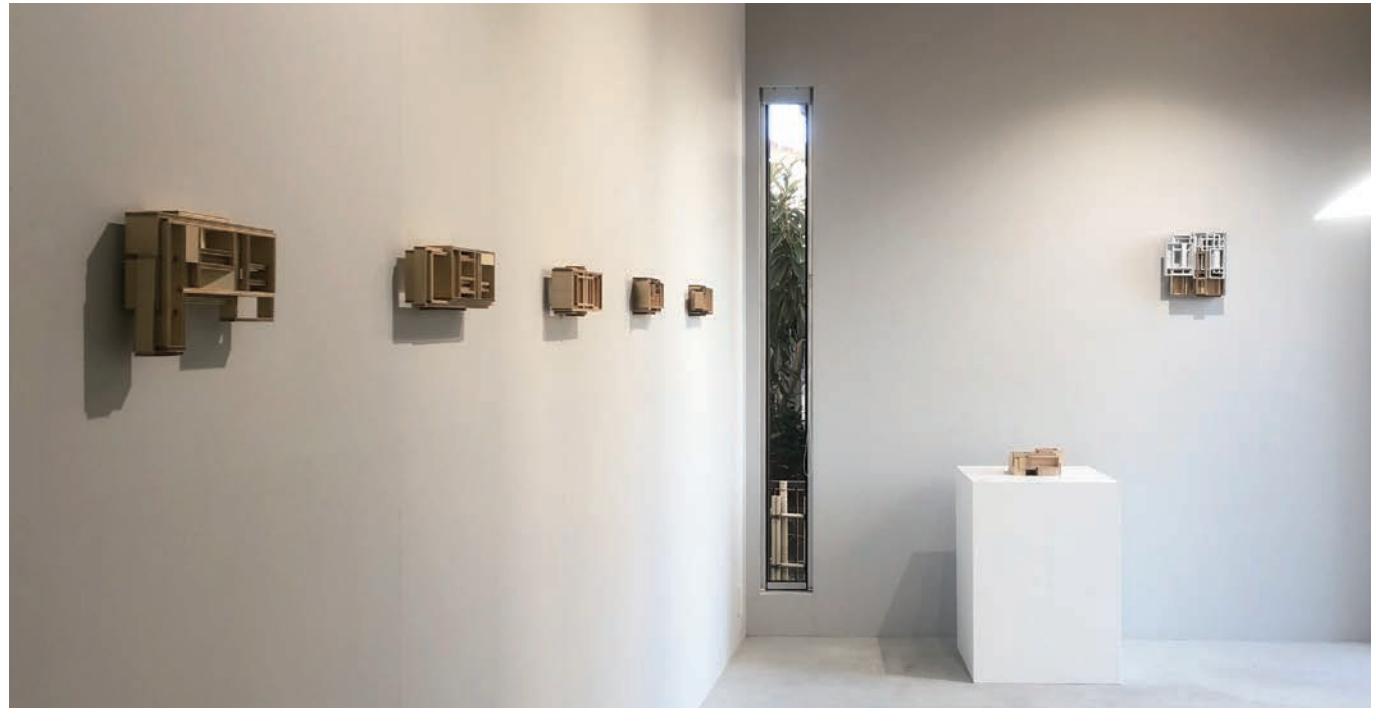
《portrait》のシリーズは、2018年に装丁家の桂川潤さんから誘われて、古典四重奏団のショスタコーヴィチ弦楽四重奏曲全集のCDBOXのアートワークを制作した時の派生作品です。多面的で陰影の強い人の肖像のイメージがきっかけになっています。

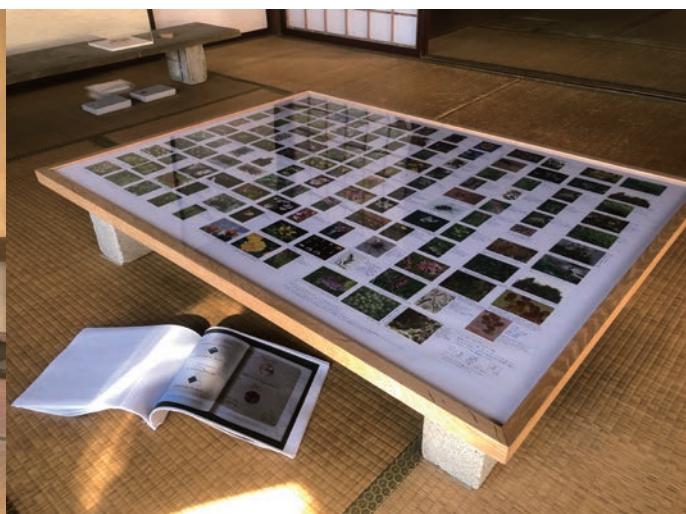


《重なる箱》のシリーズ、上が箱を分解したところ、下が組み合わされたかたち。上左から 重なる箱_6, 7, 9、下左から 10, 11, 12。

重なることについて
about overlapping

2023/12/15 金 - 25 月・2024/1/5 金 - 15 月





箱と紐と本と

2024/12/7-28 FLAT RIVER GALLERY (東京)

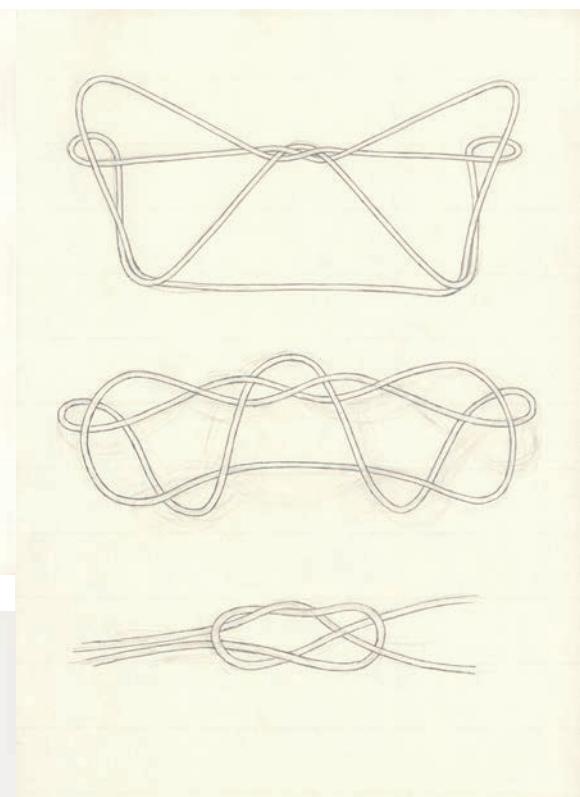
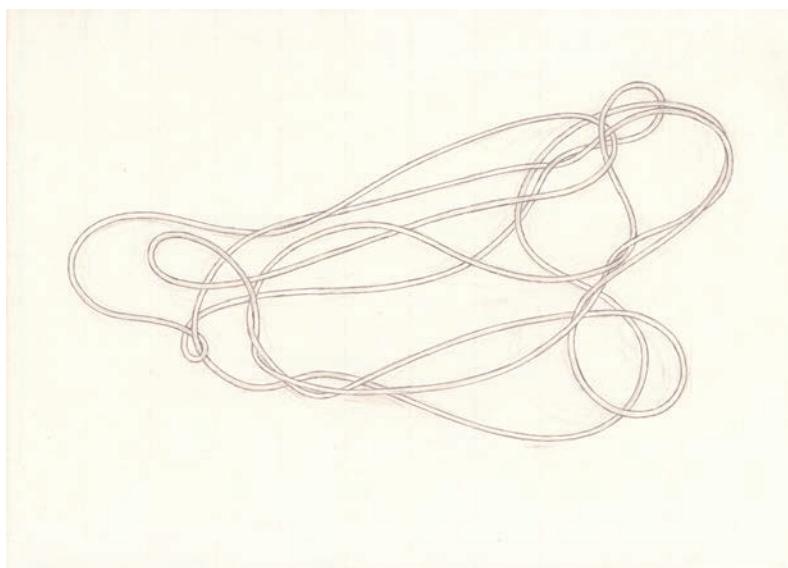
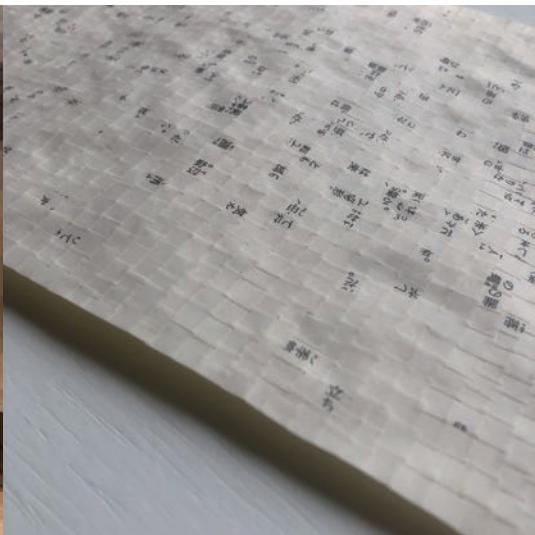


世界の成り立ちやその仕組みについて観察し、考えを巡らせるのが好きで、例えば子供が玩具や手近な物を、その手触りや重さやかたちや機能について堪能したのち、そこからはみ出して新たな景色を立ち上げるような出来事に倣おうと考えています。

今回は、箱の本質はそれをかたちづくる板厚だと考えるところから出発した異形の入れ子、「重なる箱」のシリーズと、具体物の抽象的側面に興味をもってつづけている「紐のドローイング」を中心に、そのほかの小品も交えて展示します。

今年のはじめから、料理のレシピを書くようにして、今回の出品作の一部を含む作品の具体的なつくり方を記述することで、自身の近年の制作について振り返る本を執筆していました。しまってあった作品を出してきて採寸し直したり、過去の自分がそれをどうつくったかについて観察して確認したりしました。すると、かくれた部分のほとんどない作風の作品だけれど、それでも何もかもが見えているわけではないことや、物が私からは離れて在ることをあらためて新鮮に感じたりしました。会期中に出版の日を迎える予定でいます。





箱と本

2025/3/8-29 galleria PONTE (金沢)



世界の成り立ちやその仕組みについて観察し、考えを巡らせるのが好きで、例えば子供が玩具や手近な物を、その手触りや重さやかたちや機能について堪能し、新たな景色を立ち上げるような出来事に倣おうと考えています。

今回は 2 つのシリーズで展示を構成します。

箱の本質は内側と外側を隔てるという意味ではなくて、箱 자체をかたちづくる「板厚」だと考えた異形の入れ子、「重なる箱」のシリーズと、本を読んでいるときに見ている景色は物体としての本とは別のところに、別の大きさであることの不思議について確認する「物語の量と在処」のシリーズからの出品です。

共に、「見えているはずなのに見えていなかったもの」について意識を向けることではじまった制作で、具体的には触れられる抵抗のある物体にはたらきかけてつくっているのだけれど、意識はそれ自体とそれ自体ではないものをせわしなく行き来していることについて触れられたらと思います。



